

愛媛大学教育学部

第136号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com

脱コロナ禍



高橋 治郎

愛媛大学教育学部
同窓会会長



同窓会会員の皆様、お変わりございませんでしょうか。新型コロナウイルスの2類から5類への移行となり、何とか「コロナ禍」をやり過ぎたようです。この間、五回ワクチン接種をしましたが、これが効いたのかどうかよくわかりませんが、無事生き抜くことができた。(六回目のワクチン接種の案内が来ました!) おかげで今年は、松山市から重信川(横河原)、桜三里、四国中央市へと断続的に続く美しい桜と山ツツジを見ることができました。しかし、マスクなしの生活万歳ですが、油断大敵です。もともと、外に出れば皆さんマスクをされていますし、まだまだ全国各地でコロナウイルス感染者が多数出ていますので……。

去年は、同窓会懇親会が開催されるはずでしたが、ご連絡しましたようにコロナ感染者の急増により急遽中止とせざるを得ませんでした。残念でなりませんでした。二度中止となりましたが、来年は開催できると思います。なお、来年、二〇二四年は一九四九年(昭和二十四年)に愛媛大学、そして教育学部が発足しましたので開学七十五周年ということになります。私は卒業して五十年になります。この間も愛媛大学に通いました。この間もキャンパス内はもとより大学周辺、松山市そのものがすっかり変わりました。教育学部の建物もこれまで数度改装されたり新築され、また、グラウンドもキャンパス内の樹木も切れ切れの面影はなくなりました。フーコの振り子や岩石・鉱物の標本も見ることができなくなりました。大学正門の東にある東雲小学校や日本赤十字病院も大きく変わっています。ぜひ、この変わりようを見ていただけたらと思います。

先日、私と同じ年に農学部を卒業された方が、五十年ぶりにご夫婦で九州から松山に來られ、大学に立ち寄られました。ちょうど私が居合わせたものですから、「ここにダンスパーティーをしたり、卓球部や空手部の練習場がありましたよ」と話しかけてこられ、「これがその時の建物を改装した『南加記念ホール』です」と答えたりして、楽しいひと時をもつことができました。正門側も建物が沢山建ちました。

変わったことと言えば、二〇〇四年(平成十六年)から国立大学は、大学法人となり大学の運営費交付金が毎年1%ずつ減らされてきました。その結果、教職員や研究費を減らさなければならなくなり、教育や研究に支障をきたしてしまっています。外からは、「金がないなら外部資金を調達しろ」と言われますが、科学研究費(科研費)をはじめ外部資金はそう簡単には貰えません。これは愛媛大学のみならず、日本中の大学の問題となっています。教職員数や研究費が劣悪ですから研究成果を思うように出せません。したがって、世界のトップレベルの研究はできません。世界トップの研究は、ほとんど外国に水をあけられています。そこで文部科学省は「国際卓越研究大学」を作り、十兆円規模の大学ファンドの運用益を基に一大学当たり数百億円の支援をすると発表し、公募をしました。応募条件のハードルが高く、十大学だけです。ただし、旧帝大の北海道大学は応募していません。この十大学から絞り込み「国際卓越研究大学」を決め、数百億円の支援を行うというのです……。

ご承知のように今日、教育学部は危機的状況にあります。子どもの数が減り、学校・学級数が減り、必然的に教員数が減り、その一方、長時間勤務が常態化し、教

師という仕事がブラックすぎると若者に敬遠されています。昨年生まれた子どもは、約八十万人といいことですので、私たち団塊の世代の約二百四十万人からすると、三分の一ということになります。私の中学三年の時には町の中学校が統合し、一学級五十数人で十二クラスとなりました。それで、理科室なども一般教室として利用しました。その頃のことを思うと同年齢が八十万となれば、社会が子ども一人ひとりを大切に育ててくれると思います。子どもの数が減ったから教員数を減らすのではなく、逆に教員の仕事を減らすために増員し、過労死や精神疾患にならないようすべきです。そのためには、教育にもっととお金をかけるべきです。教育をおろそかにすれば国は滅びます。五十年後には日本の人口が今日の七割になると報じられています。子どもを育てる費用、とくに教育費にお金がかかるということで出生率が低下してきています。由々しき問題です。

どうぞ今後とも同窓会活動・運営にご協力いただき、教育学部へのさらなるご支援をお願いいたします。教育学部の研究・教育をベールに、教員養成学部として望ましい教員を育て現場に送り出していつてもらいたいものです。その応援団・サポーターとしての「愛媛大学教育学部同窓会」でもあるのですから……。よろしく願います。

目次

表紙	「まもりがめ」……………松本紗絵子
題字	元愛大教育学部教授 菊川 國夫
「脱コロナ禍」……………(1)	教育学部同窓会会長 高橋 治郎
心 響……………(2)	「心に残る言葉 座右の銘」 愛媛大学教育学部同窓会 宇和島支部長 山崎 厚弘
研究室紹介……………(3)	教育・学生支援機構教職総合センター 教職支援ルーム 木村 文
職場だより……………(5)	・ 経験を糧に 西条市・大町小教諭 増田 北斗 ・ 生徒と向き合い、家族と向き合う 松山市・北条北中教諭 笹岡 祐貴 ・ 「先生」と呼ばれる責任 松山市・湯築小教諭 野口 楓 ・ 教員としての第一歩 大洲市・大洲東中教諭 川上 建紀 ・ 二十五年目の今、思うこと 内子町・内子小教諭 宇都岡奈緒 ・ 学び多き一年 西予市・野村小教諭 井上 脩

心に残る言葉 座右の銘



愛媛大学教育学部同窓会
宇和島支部長

山崎 厚弘
(昭六〇卒)

「先生、俺を見捨てるのか。」

初任者のとき、受け持ちのA君に言われた言葉です。衝撃でした。四年生がこんなことを言うのかと。

彼は、忘れ物が多く、宿題もしてきません。授業中には、私語が多く、勝手なことをすることもありました。また、授業開始のチャイムが鳴っても教室に戻って来ないことも。強く注意をしてもなかなか改善しません。そこで、注意をするのを一時止めてみることにしました。その時に彼が発した言葉です。教師になりたての自分には、彼の表面的な行動しか見えず、何とかしないといけないという注意を繰り返すだけになっていました。

先輩の先生から、前年に父親を亡くしているという話を聞き、今まで以上に一緒に遊び、しっかりと話を聞くようにしました。もちろん注意はすぐに再開しました。その後その回数は徐々に減っていききました。

「先生になって、つまらん。」

昼休みには、クラスで遊ぶなどして学級づくりに励んでいました。しかし、B君の暴言や弱い立場の友達への暴力へは厳しく指導をしていました。そんなときに言われた言葉です。

「今のうちに直さないと中学へ

行ったら大変なことになるぞ。」
「そんなこと分かっとる。中学校ではせん。」
というような会話を今でも覚えています。

彼は、中学校では運動部に入り、大きな問題は起こしませんでした。しかし、高校生になってすぐに、ある機関から問い合わせの電話がありました。申し訳ない思いと、力不足を強く感じました。

「先生は、手を出せんやろ。」

教師の体罰問題が、連日報道されていた頃でした。悪ふざけが度を過ぎていたC君に厳しく指導をしていたときに発せられた言葉です。

小さいことは見逃し、度が過ぎたときには、共感的に話をすることを心掛けて指導を繰り返しました。すぐには改善されませんでした。大きな問題には至りませんでした。理解力があり、聞く耳を持っていた児童だったことに救われました。

「楽あれば苦あり、苦あればこそ楽あり」

誰の言葉なのかは分かりませんが、卒業生に送る言葉としてずっと使ってきました。

楽しむときには、おもいっきり楽しみ、うれしいときには、しっかりと喜ぶ。しかし、切り替えが必



要。いつまでもいいことばかり続きはしない。

頑張っていれば必ず得ることがある。いざれ結果として表れる。辛いこと、苦しいことを乗り越えたとき、達成感、充実感、喜びがある。苦しいことが大きければ喜びも大きい。すぐに諦めれば、努力を止めてしまえば、苦のみで楽が得られない。

先日、愛媛マラソンが行われました。見事ゴールされた方々は、「苦あれば楽あり」を体感されたことでしょう。私は、十七年前までトライアスロンをしていました。フィニッシュ後の充実感と、がぶ飲みするドリンクのおいしさを思い出します。

「挨拶・素直・感謝を大切に」

大切なこととして、この三つを子供たちに話すことがあります。これは、自分にも言い聞かせていることです。

一つ目は、「挨拶」です。言うまでもなく、挨拶ができない人と人との良好な関係は築けません。相手の年齢に関係なく、気持ちの良い挨拶・返事が大切です。初対面であれ、一日の初めであれ、活動中であれ、お互いに気持ちのよいスタート・状態でいたいものです。

二つ目は、「素直さ」です。人の意見や助言を素直に聞くことができず、自分を成長・向上させることができません。また、困難から早く抜け出すこともできません。例えば、運動の練習方法を教えてもらうことがあるとします。聞く耳を持たないと、次からは教えてくれなくなります。「あの人に言っても、嫌な顔をする。」「言っ

ても何も変えようとしません。」とか、思われてしまうと終わりです。素直に聞き、やってみる。やってみて、どうしても自分に合わないければ、別の方法を考えればいいのです。そのことを話すと、新しい方法を教えてくれるかもしれない。何かを言ってくれるということは、「気に掛けてくれている。」「心配してくれている。」ということなのです。

三つ目は「感謝の気持ち」です。オリンピックや国際大会後の選手インタビューを聞くと、家族、監督やコーチ、会社や競技連盟、会場やテレビなどで応援してくれている人たちが等への、多くの感謝の言葉が述べられています。自分一人では決して成功しません。何もできません。「みんなのおかげ」で、今の自分があるのです。そして、これからもそうです。感謝の気持ちを持っていると、直接的・間接的に、周りが声を掛けてくれたり、助けてくれたりするでしょう。

卒業式の式辞の中で、「中学生になっても、大人になっても、挨拶・素直さ・感謝の気持ちを大切に、周囲に支えられ大きく成長していくてください。」と述べています。

「あの時は、いじめから救っていただきありがとうございます。」
「先生のおかげで走るのが好きになりました。」
「中学・高校でも続けました。」
こういう言葉や日々の子供の笑顔、成長により、三十八年間教職を続けることができました。関わってくださった皆様お世話になりました。ありがとうございます。

教育学部の授業紹介……………(11)

「幼児教育実践論」

表紙作品「まもりがめ」について……………(12)

先輩を偲ぶ……………(13)

「あしあと(8)」先輩たちのあしあと……………(14)

同窓会事務局……………(15)

会員の声……………(16)

・「教育学博士」論文の完成を目指して……………(17)

―大拙・英訳「教行信証」の研究―……………(18)

吉原 宏文……………(19)

井手窪 理……………(20)

役員表……………(21)

事業・決算報告……………(22)

同窓会会則……………(23)

支部活動支援金交付要綱……………(24)

教育学部からのお知らせ……………(25)

教育学部のコース再編について……………(26)

愛媛大学教育学部……………(27)

放送大学……………(28)

同窓会事務局からのお知らせ……………(29)

敬弔・寄付者名……………(30)

裏表紙……………(31)



研究室紹介



教育・学生支援機構教職総合センター 教職支援ルーム



教育支援員 木村 文 先生

「教職支援ルーム」を知っていらっしゃるでしょうか。私は、現在十五年目を迎えるこの教職支援ルームで当初から教育支援員として働いている木村です。

二〇〇九年四月から愛媛大学教育学部二号館一階に「教職支援ルーム」は設置されています。教



職支援ルームの役割は、主に「学生の教育体験活動の支援」と「教員採用試験に関する支援」の二つです。教師を目指す愛媛大学のすべての学生に、教職に関する情報を提供し、教師としての必要なスキルを身につけてもらうためのサポートを行っています。

教育学部二号館一階は、二〇二一年に改修工事が終わり、教職ストリートとして生まれ変わりました。

高度化ゾーン（多目的オープンスペース）、模擬授業教室（学校の机、黒板を設置）、オープンラボ教室（実験や制作活動等）、カンファレンスルーム（会議等）、キャリア開発室（教材づくりや大型タッチパネルを活用したグループ活動等）、スキルアップルーム（1・2・3（少人数自主学習室）、



そして教職支援ルームなどがあり、学生で大いに賑わっています。私のいる教職支援ルームには、パソコン、プリンターなどの機器類、授業作りや教材研究に役立つ教科書、指導書、学習指導要領などの書籍、教員採用試験に向けて過去の問題や月刊誌、教育に関する書籍などを置いています。

教職支援ルーム ホームページ

<http://tdsrc.te.chime-u.ac.jp/>

●学生の教育体験活動の支援

愛媛大学教育学部では、一年次の「観察実習」、二年次の「教職体験実習（ふるさと実習）」、三年次の「教育実習」、四年次の「応用実習」など、教師として経験を広げることが目的に、理論と実践を連携させるための実習カリキュラムがつくられています。それに加え、一年次から参加できる「地域連携実習」は、小・中・高等学校での学習支援、運動会や野外活

動の補助など、学校現場や社会教育の場で子どもたちとふれ合うことができます。また、学生が主体となつて企画を行う事業もあります。「地域連携実習」は一年次からいつでも、どれにでも自分の意志で参加できる自由な教育体験活動です（教育学部生以外も参加可能）。この自由な教育体験活動の窓口になっているのが教職支援ルームです。

地域連携実習は、学生が地域の学校・教育関係機関等において教育支援実習を行う活動であり、教師を目指している学生にとって、様々な教育現場で子どもとかわるごとのできる貴重な体験の場となっています。コロナ禍で二年間中止になっていた地域連携実習ですが、三年ぶりの地域連携実習は、途中で感染者数の増加等により、中止になるものもありましたが、キャンプや授業の補助、学校行事の補助など数多くの活動があり、



学生の教育体験を支えてくれました。コロナ禍で、学生は、ほぼボランティアなどできない情勢でしたので、やっと外で活動できるということで、結構遠くの小、中学校にも喜んで参加していたように感じました。

【2022年度の地域連携実習の現状】

- ・事業提供機関（協力校） …… 42
- ・全事業数 …… 104
- ・参加者数 …… 302
- ・延べ参加者数 …… 443

地域の方々に支えられ、多くの提供事業をいただいて、延べ四百四十三名の学生が松山市や地方のボランティア活動に参加しま



した。協力してくださった機関の方々から、「学生が真摯な態度で参加をしてくれ、積極的に児童とコミュニケーションを取ってくれた。」「教育実習を終えている学生は、子どものかかわりだけでなく、自発的に行動している姿が見られて、とても助かっている。」「個別の指導が行き届くようになった。」と好意的に受け取ってもらえているようです。また、学生を募集するにあたり、休憩場所を設けてくださったたり、多くの職員が声掛けをしてくださったたり、授業の配慮事項や生徒対応など、質問に答えアドバイスするなどのサポートをしてくださっています。

す。

【地域連携実習の具体的活動例】

- 学生企画型
学生が企画し、土曜日や日曜日に子どもたちを相手にして実践を試みる学生企画型の活動
- 短期実習
水泳や運動会の補助、部活動の補助、放課後学習の補助、キャンプの手伝い、宿泊合宿の手伝いなど
- 継続型実習
授業の補助、配慮を要する児童の支援、部活動の補助、施設でのボランティアなど

● 教員採用試験に関する支援
教職支援ルームには、教採対策の雑誌、教育新聞切り抜き速報や教育ジャーナル、日本の教育等においているので、現在の教育に関する情報を得ることが出来ます。また、全国の教員採用試験過去問や卒業生が残してくれた過去のデータも豊富に揃っているため、有用な情報が得られます。

また、全学の教員を目指す学生を対象にしていますので、教員採用試験の受験者にとって、学部を超えて、同じ都道府県を受ける仲間や同じ校種の仲間と知り合える場にもなっています。

教採二次試験が終わる八月いっぱい、教職ストーリーの部屋を利用し、四回生が受験に向けて自



主勉強、面接練習や模擬授業練習に精を出しています。

一、二、三回生の時点から教員採用試験の問い合わせに来る志の高い学生も少なくありませんが、主に、下の学年は、大学の授業の準備等で教科書や指導書を見るのに、教職支援ルームを利用しています。

教員採用試験の相談や、地域連携実習の相談、将来の不安や学生

【教職支援ルーム、スキルアップルーム、キャリア開発室、カンファレンスルームの利用状況】

- 2022年度……約2,500名
- 2023年度……約1,250名

(4月～7月)



間の悩みなど、相談に来る学生も多くいます。「外国に行ってみたのだけれど教員採用試験もあるので行けばいいだろうか。卒業してすぐがいいのか、就職してからがいいのか。」「教員採用試験について、何から勉強したらいいだろうか。」「公務員試験と実習がかぶりそう。教員免許を取るべきか迷っている。」「大学で何を今から頑張ればいいのかわからない。」「自分の教採を受ける県の情報を知りたい。」「初めて、地域連携実習で実習校に電話をかけたが、不安なのでここでかけてもいいか。」といった様々な相談を受けます。

また、卒業生が休みを利用して、教職支援ルームを訪ねて来てくれます。その時に居合わせた大学生との交流もなかなかいいものです。現場の様子や仕事内容など



質問攻めにあう現役の先生は頼もしい限りです。

新型コロナウイルスの拡大に伴い、大学では二年間、学生の出入りに規制がかかり、学生同士集まってくるの勉強も人数制限などの細かい規定を設け、教員採用試験過去問や先輩の報告書を見たい学生に、予約制にして教職支援ルームを利用してもらうなど教員採用試験を受ける学生にとっては、厳しい時期を過ごすことになりました。教員採用試験の内容も以前と比べると内容を変えている県も多くみられ、混乱の中教員になっていった卒業生たちには、手厚いサポートをすることができませんでした。

やっと、昨年度から以前のように、多くの学生が教職支援ルームを訪れてくれて嬉しい限りです。今後も、できるだけ学生の相談に乗り、大学生活の潤いの一つになればと思っています。

職場だより

経験を糧に



西条市
大町小教諭
増田 北斗
(平二九卒)

私は今年度から愛媛県西条市立大町小学校で勤務をしています。私は二〇一七年に愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程を卒業し、私の育った土地である広島県で教員になりました。その後、六年間広島県の府中市や尾道市で教員をし、二〇二三年四月から愛媛県の教員になりました。

子どもをいかす授業

初任の時は、自分が思い描いていた教師という仕事と現実のギャップに戸惑いの連続でした。学級事務の多さや保護者の方への連絡、提出物のチェックなどたくさん業務に追われていました。自分が力を入れたいと思っていた授業研究をする時間もなかなかとることができませんでした。その結果、クラスも落ち着かず、自分の理想として考えていた学級には程遠い状態でした。自分は教師という仕事に向いていないのではないかと悩んだ時期もありました。そんな中、少しでもなんとかしよ

うと思い、土日を使って様々な自主研修に参加しました。学んだことがすぐに成果につながったわけではありませんが、自分の視点を広げるきっかけになりました。そうやって自分の視野を広げていくことで、今まで見えなかった子どもたちの良さや頑張り気付くことができました。すると、だんだんと自分がいかに子どもたちを自分の都合のいいように動かそうとしていたかを思い知りました。子どもたちはこんなにも真つ直ぐで、一生懸命自分と授業に向き合ってくれていることに気付きました。そこからは、自分の授業のスタイルを変え、この子がどの場面で活躍できるか、あの子のいい所をクラスの子どもたちに伝えることができるようにするにはどういう展開がいいかと考えるようになりました。そうすることで、今まで教師である私が主体で授業を進めていた授業スタイルから、子どもたちに任せて、委ねて、考えさせる授業スタイルに変わっていききました。子どもたちの表情も今までとは違い、いきいきとし始めたのを今でも覚えています。そんな子どもたちを見ていると教師としての仕事というのは、子どもたちがいきいきと学びに向かう姿をいかに支えていけるかということだと感じるようになって

きました。

リーダーとしての苦悩

初任校での二年を終え、三年目の時には、外国語の教科化に向けて、外国語の授業作りについて研究・発信をしていく広島県外国語パワーアップリーダーという役割をさせていただくことになりました。初めは、自分が市内の代表として研修をしたり、モデルとなる研究授業を見せたりするというのは正直荷が重いと考えていました。教員としての経験も浅く、自分自身の授業に自信を持てていないわけではなかったのですが、どうして自分かと思う時もありました。しかし、いつまでも悩んでいるわけにはいかず、授業が始まりました。自校だけではなく、市内の先生方に発信していくということもあって毎時間の教材研究を丁寧に考えました。しかし、初めての外国語の授業ということもあって子どもたちがいきいきする授業を作ることができませんでした。子どもたちのどんなよりとした顔や空気感がとても悔しかったのを覚えています。そこから外国語を研究していくうちに、外国語で重要なものは「目的・状況・場面」を明確にしたやりとりを行うことであるということを知りました。一つ一つのやりとりや活動をなんのためにしているのか、単元のゴール場面はどういう状況や場面でのやりとりなのか、ということを確認に学ぶようになっていききました。また、ゴール場面が明確になってくることで、「日本にくる

留学生に伝えるなら」は伝えるべきだよね。」「この場面ならジェスチャーをつけた方が自分の気持ちがよく伝わると思うよ。」などと思いを働かせていく授業になっていききました。そうすることで、教師が教える授業ではなく、子どもたちが学びたいことを自ら学んでいく授業を作ることができてきたのです。自分の意識を変えることで、子どもたちの様子も変わってきました。休憩時間にも関わらず、「〴〵英語でどう言うのですか?」と聞いてくる子どもや「スピーチの練習をしたので聞いてください」という子どもが増えてきました。そういった子どもたちの姿を市内の先生方に見ていただくことが、私の研修に説得力をつけてくれました。研修を受けてくださった先生方もこんな子どもたちを育てるためにはどうしたらいいのか、どうやったら自ら話そうのか、こうとする子どもになっていくのか一生懸命聞いてくださいました。どれだけ理論を話すよりも成長した子どもたちの姿を見ることが一番の刺激になるということに身に染みて実感しました。この時から、自分が偉そうに話すのではなく子どもたちの成長の事実を提示する実践家になっていきたいと思うようになりました。その後、させていたいただいた研究主任でもそのことを意識し、それぞれの先生方が積み上げてきた事実を共有するということを意識して研究を進めていききました。この経験が自分の教師としての基盤になっていると今でも感じています。

県を越えた教師

教員になって七年目の年に広島県から愛媛県の西条市立大町小学校に転任になりました。最初は、県それぞれのやり方の違いに戸惑うことがたくさんありました。学校のシステムや会議の形態、校内のネットワークなどわからないことばかりで、前の職場の方がやりやすいなと感じることが多かったのです。しかし、仕事を進めていくにつれて愛媛県ならではの良さもたくさん見えてきました。課題のある児童一人一人を学校全体で共有し、その子の特性や課題をみんなで支えていこうとする取組や様々な行事に先生方全員が自分ごととして参加しようとしている所など、一つ一つの活動を丁寧にしている所が愛媛県の良さであると感じました。また職員室の雰囲気もよく、気軽に相談することができたり、何気ないプライベートの話ができたりと和気藹々とした空間になっていたというのも今の職場のステキな所だと思います。私は、愛媛の教育と広島県の教育どちらも経験できているということが強みになっていると考えます。どちらの教育がいいということではなく、両方の優れている所を考えていくことで、より効率的で子どもたちの力がつくような教育を目指していきたいと思っています。これからは、私も愛媛県民として愛媛の教育に尽力していきたいと思っています。

生徒と向き合い、 家族と向き合う



松山市
北条北中教諭
笹岡 祐貴
(平成三〇卒)

高知県出身の私は、愛媛県での講師三年、高知県での講師一年を経て、新規採用となった。愛媛大学を卒業してから実に四年目での採用だ。講師の四年間は一年ごとに勤務校が変わったため、四つの中学校でお世話になった。この四年間の講師経験が、私にとっても大きな財産であり、この四年間があるからこそ、教師という職業に誇りを持って笑顔で働くことができています。

講師一年目、四国中央市の中学校に赴任し、土地勘がなく、職員会の内容が十分に理解できない中で、一年生の学級担任を任された。それでも周りの先生方にたくさんサポートしていただいたおかげで、怒涛の一年間を乗り越えることができた。生徒を前にして初めての授業は、教育実習での授業とは比べ物にならない緊張感があったが、生徒にさとりえないようにと、笑顔でなんとかごまかすことに必死だった。学級経営は自分の個性を生かして、とにかく元気に明るく生徒と接することを心掛けた。生徒指導に関しては、学年主任や生徒指導主事の先生に入って

もらい、指導の様子や生徒の反応を目の前で勉強させていただいた。部活動は専門外の卓球部の顧問となり、生徒と一緒にラケットを振った。ラケットの振り方を知らない私に、当時の三年生たちが卓球を教えてくれて、卓球の面白さに気付くことができた。専門外の部活を持つことに当初は不安しかなかったが、生徒たちと活動する時間が長くなればなるほど生徒との信頼が深まっていき、部活動の意義を少しずつ感じられるようになった。ただ当時は、技術面の指導は一切できなかったため、選手たちへの感謝の気持ちとともに、悔しい気持ちも感じていた。

講師二年目は、高知県の中学校での勤務となった。今振り返ると、ここでの一年間が最も大変で、最も多くの経験値を得ることができたと思う。というのも、その学校では、教科を縦持ちし、三年年の社会科を教えないといけないかった。教材研究を三学年分するというのは、講師経験二年目の私にとっては、想像をはるかに越える大変さであった。また、毎授業ICTの活用が必須とされていたので、授業で使用するスライドの作成をしなければならなかった。講師一年目の授業では、ICTは使っていないかったため、どのように使用すればいいのか、自己満足のスライドではなく、生徒たちにとって、効果的なスライドをつくることを意識した。同じ教科の先輩の先生にアドバイスをいただきながら作成したスライドや資料

は、今の私にとって宝物である。その宝物は、現在でも改良を重ねながら授業で使用している。ロイロノート(教育機関向けソフト)と組み合わせることによって、更にICTを効果的に活用することができている。生徒同士であたこうだと言いながらグループ活動をする様子は、三年前の自分には生み出せなかったものである。これからも、二年目研修や、校内研修、校外研修に積極的に参加し、自己研修に努めていきたい。

講師三年目は、再び愛媛県に戻り、松山の中学校に赴任した。当たり前前のことではあるが、一年ごとに学校が変わると、様々な生徒や先生と出会うことができる。その出会いのたびに、これまでの自分の価値観や知識は、浅はかであらうなと考えるようになった。様々な人たちと出会うことによって、様々な価値観や考え方を知ることができるのは、人生において非常に大切なものであると同時に、生徒と向き合うために必要な、教員としての要素であると思う。特に今でも心に残っている言葉は、「生徒ファースト」である。当たり前ではあるが、講師三年目の自分は、できる気になっており、自分の都合を優先することが多かった。そんな時に、先輩の先生から掛けていただいたその言葉で、初心に戻ることができた。おごっていた自分に、改めて生徒ファーストの大切さを気付かせていただいた先生とは、現在となり

る。そのため、他にも勉強になることが多く、感謝の気持ちでいっぱいである。もちろん、他の先生方からも日々、多くの気付きや学びをいただいているため、感謝の気持ちを忘れることなく、謙虚であり続けたいと思う。そして、この先の多くの出会いも大切にしていきたい。

教師という仕事は、日々、生徒と向き合いながら生活を送っているが、講師四年目のある時、「自分は自分と向き合っているのか?」と考えたことがある。自分と向き合うとはどういうことかあまり明白ではないが、「自分の人生について考えているか?」ということだと思う。最近よく耳にする「ワークライフバランス」という言葉。これまでは見向きもしていなかった言葉であるが、親となった今では、この言葉が頭の半分以上を占めている。学校の生徒たちはもちろん大切であるが、大切にしようにするとどうしても時間が少なくなってしまう、家庭に費やす時間が少なくなってしまうことが多々ある。休日である土日の、どちらかは部活動をするため、家庭に丸々一日費やせるのは、週に一回のみである。今の私は、自分のワークライフバランスがとれていないと思う。生徒と向き合いながら、家族との向き合う時間も大切にするためにはどうしたらいいのか正直分らない。いや、分かってはいるが、行動に移せないだけなのかもしれない。今よりもっと効率よく仕事できればいいの

だが、今の自分の能力では、今の状態が限界である。なかなか前に進めないときに、ある先生のお話の中で、「ライフワークバランス」という言葉を耳にした。「ワークライフバランス」ではなく、「ライフワークバランス」である。聞き間違いかとも思ったが、そうではなかった。ライフワークバランスとは、生徒と向き合う教師が、心身ともに健康で、元気であることが、生徒たちに良い影響を与え、ということであった。生徒たちのために頑張ることは当たり前だが、体調を崩してしまったり、疲れが見えてしまったりしては、元も子もないということで、ライフワークの前にきている。このお話を聞いたとき、自分の中で、背負っていた重いものが、一気に軽くなったように感じた。生徒ファーストであるのは前提だが、家族ファーストでもあるために、それぞれの時間を大切にしながら、ライフワークバランスを大切にしていきたい。



「先生」と呼ばれる責任



松山市
湯築小教諭
野口 楓
(令三卒)

私が教員を目指したきっかけは、中学三年生のときの担任の先生との出会いです。その当時、自分の理想の姿と現実に大きなギャップを感じ、自分に自信がも

てず、情緒不安定になることも多くあった私を、その先生は、いつも励ましてくれました。その先生が自分を頼って、信じてくれるからこそ、「自分にはこんないいところがあるんだ」「自分にはこんなことができるんだ」と気付くことができ、自信をもつことができたことが多くありました。当時、「自分もこの先生のようにになりたい」と強く感じたことを今でも覚えています。歳を重ねるにつれ、教員への憧れは大きくなり、大学受験の際には迷わず教育学部を選択しました。同時に「今まで出会った先生方と一緒に愛媛県で仕事してみたい」という思いもつようになり、愛媛大学に入学しました。

愛媛大学では、地域連携実習や附属中学校での教育実習を通して、子どもたちとかわかることや教えることの楽しさ、同じ時間を

共有し、成長を目の当たりにすることのできる喜びを感じることができ、充実した四年間となりました。大学二回生のときのふるさと実習では、母校に行かせていただくことができ、恩師の先生と一緒に仕事をすることができ、貴重な体験をすることができました。多感な時期であり、さまざまな悩みを抱えている中学生に寄り添い、相談に乗っている姿から、多くのことを学ぶことができ、今の生徒指導にも生かすことができているように感じます。

無事、中学生の頃からの夢だった職業に就くことができ、緊張も混じりながら、期待に胸を膨らませてスタートした一年目でしたが、憧れの教員生活は苦労の連続でした。実習生のときには経験することのなかった仕事がたくさんあり、上手いかわない日々が続きました。日々の授業、生徒間のトラブルの対応、部活動指導、保護者対応など、しなければならなかったことが多く、毎日一杯一杯になっていました。また、一年目は中学校での採用でしたが、二年目からは小学校へ赴任になり、実習経験がなく、あまりかわったことのない小学生との日々が始まりました。小学校教員としての生活もまた、苦労の連続でした。慣れない環境についていけず、イライラしてしまうことが多くありました。子どもたちの可能性を信じ、寄り添うことのできる教師を目指して

いたにもかかわらず、思い描いていた憧れの教師像には程遠い自分の姿に悩むこともありました。また、二年目に強く感じたことは、「自分は先生と呼ばれる資格があるのか」ということでした。教員生活二年目は五年生の担任でした。中学生とはまた違い、幼さが残る子どもたちは「先生！先生！」と慕ってくれました。慕ってくれたり、信用してくれたりするようになればなるほど、自分の中で自分の不甲斐なさが増し彫りになり、責任の重さを感じるが多くなりました。

いろいろなことに悩み、葛藤も抱えながらの毎日でしたが、この二年間で、数え切れないほどの思い出ができました。特に思い出に残っているのは、一年目に勤務していた中学校での出来事です。そのときは中学一年生の担任でした。九月の運動会練習時期。一年生は団体種目での優勝を目指して、それぞれクラスで団結し始めていました。他のクラスでは、自分たちで作戦を考えたり、自主練習をしたりと、生徒たちが自分で考えて動くことが増えてきていました。しかし、私のクラスは一向にまとまらず、練習ではいつも最下位でした。どうしてだろうとたくさん原因を考えました。ふと、他の先生と自分の姿を比べてみたのです。その時、生徒の行事だからといって、どことなく距離を置き、自分自身が本気で楽しむこと

ができていなかったと気付きました。それだけが原因ではないかもしれないですが、その日から私は自分も練習にどんどん入り、生徒と一緒に作戦を考えたり、学年での練習の際には全力で応援したりしました。自分が本気で楽しんで

いる姿を生徒に見せることで、生徒たちの取り組み方も少しずつ変わっていった気がします。そして、本番前の最終練習では、初めて一位を取ることができました。あのときの生徒たちの笑顔は今でも忘れることができません。そこからクラスの合言葉は「やればできる」に変わり、生徒たちは自分たちもつことができるといふ自信をもつことができました。行事一つをとっても、子どもたちにとっては貴重な成長の機会であり、教師がどのようにアプローチするかで、子どもたちの成長の度合いは変わってくるのだということをこのときに学びました。他にも、日々の授業で、できなかったことができるようになったときの子どもの笑顔や、学校行事に生き生きと取り組み、達成感を味わうことができた姿を見たときには、教員になってよかったと感じます。

こうして教員生活を振り返っていると、さまざまな人たちに支えられてこまでくることができたのだと感じています。恩師の先生をはじめ、愛媛大学で指導いただいた先生方、実習先でお世話に

なった先生方、同僚の先生方など、わたしの周りにはいつも温かい人たちが溢れていました。子どもたちと本気で向き合い、子どもたちの成長を本気で喜ぶことのできる先生方と出会えたことは自分の大きな財産です。

これからも常に「学び続ける姿勢」を大切にし、子どもたちの可能性を伸ばし、成長を支えることのできる教師になりたいと思います。また、恩師の先生が私にくれたように、子どもたちに自信をもたせることのできる教師でありたいです。そのためにも、毎時間の授業や日々の子どものたちのかかわりを大切にし、よりよい関係を築いていきたいです。教師であることに「責任」をもち、日々成長していきたいと思っています。



教員としての第一歩



大洲市
大洲東中教諭
川上 建紀
(令四卒)

激動の四月が終わり、教員としての新生活が始まってから約一か月半が過ぎました。今まで学生として過ごしてきた学校とは、全く別の場所に感じられるほど全てが新鮮でした。特に新形式からの一週間は、一日がいつの間にか過ぎていく一方で、これまでに経験のないほど長く密な一週間でした。

教員としてのスタート地点となった大洲東中学校は、比較的規模の小さい学校で、生徒や先生方の数も多くありません。いずれは小規模校で働いてみたいという気持ちはありましたが、まさか一年目からそのチャンスが巡ってくるとは思っていませんでした。私は松山で生まれ育ったので、馴染みのない南予で働くことに不安はありましたが、着任し、一緒に働く先生方や、子どもたちに出会ったときにその不安はなくなりました。

ただ教員数が少ない分、やはり一人一人の仕事の負担は大きくなります。私は学級担任、部活動の顧問、体育の授業などを主に任せていただいています。他の先生などに助けていただくこともありませんが、ほとんどは自分で計画を立てて動いています。責任や負担も

大きいですが、その分充実していて、やりがいを感じながら毎日過ごしています。

学級担任としては、二年生を受け持っています。二年生は賑やかさの中にも落ち着きがあり、毎日行くのを楽しみにさせてくれるような学級です。年度初め、初めて教室に上がったときに、全員が静かに席に座っていたのには、こんな中学生がいるのかと驚かされました。しかし、しばらく経つと、少しずつ本性を現してきました。人懐っこさがあり、時には元気づけて困るときもありますが、毎日の生活に彩りを与えてくれる存在です。二十人に満たない学級ですが、その分一人一人の生徒と密に関わる事ができるのがいいところでもあります。「あゆみ」に生徒が書いた日記や質問などを見て、コメントを返すのが毎朝の課題です。生徒と直接話すのも楽しいですが、生徒の意外な素顔を見られるので、毎朝それを楽しみにしています。

また、二年生の大きなイベントには、「職場体験学習」があります。私自身が中学生のころには、今教員として働いているとは思っていませんでしたので、そういった経験も伝えながら、職場体験に向けた準備を進めています。生徒も自身の将来について真剣に考え、職業調べなどに取り組んでいるところだです。その姿を見て、生徒のより良い将来をサポートできる職業に就けたことに、改めて誇りを感じています。

部活動では、野球部を担当しています。私の専門が野球というこ

ともあり、一年目から専門の顧問を任せていただけたことを、本当に嬉しく思っています。人数が少なく、合同チームを組んで練習や試合もすることもあります。放課後にできる練習も限られているので、そこには難しさを感じていますが、生徒が「どうすれば上手になりますか。」と聞きながら真剣に取り組む姿や、楽しんで野球をする姿を見て、私も力をもたっています。また、時には私も子どもに混ざって野球をすることもあり、ただひたすら夢中でボールを追いかけていた子どもたちの戻らせてくれる場にもなっています。私が経験してきたことを伝えながら、野球の面白さや奥深さを知ってもらえればと思っています。部活動は地域移行の流れにあります。私はこれからもぜひ部活動に携わりたいと改めて感じています。

体育の授業では、全学年を担当しています。体育の教員が自分一人しかいないため、全て手探りの状態で授業を進めています。私はチャンスだととらえています。手本がない分、常識にとらわれないので、ユニークな授業を生み出すことができると考えているからです。一年目だからこそ、色々と試しながら失敗することもできるので、貴重な機会にこれからの授業の基礎を作っていきたいと考えています。ただ、やはりまだいい授業ができていないとも言えます。実習のときは違い、他の仕事をしながら授業の準備をする必要があるのですが、十分に準備をできないまま授業を迎えてしまうとき

もあります。指導力不足を痛感していますが、その分、毎日たくさんのことを吸収しながら勉強しているところです。大学で学んだ知識も活用していきたいながら、現状に満足せず、常に高いレベルを目指して成長していきます。

これらを通して子どもと関わる中で、共通して私が軸にしていることが二つあります。一つ目は、「失敗から学ばせる」ことです。私もそうでしたが、中学生は失敗を恐れて行動をためらいがちです。失敗を恐れて行動しないことは、生徒自身の可能性を狭めてしまうこととなります。子どもがのびのびと活動し、失敗から学びながら成長することができるよう、どんな失敗しようという雰囲気作りは大切にしています。

そしてもう一つは、「自分で考える」ことのできる生徒を育成するということです。情報化に伴って急激に社会が変化し、これから予測不可能と言われている中で、自分で情報を集め、選択し、行動する力が必要になると考えています。単に自分で考えるように言うだけでなく、学級や部活動、授業などの活動の中で身に付けていってほしいと考えています。そのためにも、まずは私自身が自分で考え、実践することができるようになっていきます。

約一か月が経ち、これまでは目の前の一日を乗り切ることに精一杯でしたが、少しずつ教員としての仕事にも慣れてきました。初めは何がわからないのかもわからない状態で、失敗することもあった中で、周りの先生方に丁寧にフォ

ローしていただきました。遅くまで学校に残った日に、来たときよりも帰るときの方が、仕事が増えていたときはどうなることかと思いましたが、今では心も机の上も少し整理できました。これからは、特に授業準備に時間を割き、質の高い授業を作ったり、実践したりできるようにしていきます。

周りからはブラックだと言われる教員の仕事ですが、私は今の生活にとっても充実感を感じていますし、これからも教員として仕事を続けていきたいと強く感じています。生徒や先生方、保護者の方、地域の方などに、助けていただければかなりの毎日ですが、毎日確実に自分自身の成長を実感しています。教える立場になったからこそ、自分自身が学び続けながら、背中を追いかけてもらえるような存在を目指して、これかも子どもたちを全力でサポートしていきます。



二十五年目の今、 思うこと



宇都岡奈緒
(平一 一卒)

内子町
内子小教諭

愛媛大学教育学部を卒業したのは、今から二十四年前のことです。学生時代を思い返すと、つい先日のような気がしますが、数えてみると、約四半世紀の日々が経過していると気が付き、驚くばかりです。私の教員生活も同じ年数を重ね、講師年数を含めると二十五年目となりました。その間、周囲の方のご理解もあり、六年九か月という長きにわたる育休生活もありました。

そんな私の今までの教員生活で、一番たくさん担任をさせていただいた学年は小学校一年生です。目をキラキラ輝かせ、ピカピカのランドセルを背負って入学してくる一年生は、小学校生活への期待や希望がいっぱいです。挨拶の勉強、平仮名の練習、学校探検。何をしても楽しく、何をしても一生懸命です。けれど、その分、不安と緊張も大きく、毎日精一杯気合いを入れて登校してくる子どもたちも少なくありません。講師時代は、そんな子どもたちとたくさん遊び、たくさん話し、関わることで信頼関係を築いてきました。その中で、みんなが立派な一年生になることができるように、多少厳しく指導したこともありましたが、しかし、現在の私は、そんな

子どもたちの学校での支えになりたいと考えています。

私自身、三人の娘を産み、育ててきました。長女の育児では、親として何もかも初めての経験ばかりで、分からないことが多く、不安になり、娘ともども神経質になってしまっていました。そのため、長女は、自分の感情をコントロールすることに難しさがあつたり、完璧主義のようにきちんときなければ自分が納得できないこともあつたりしました。子育てをしていく中で、育児の大変さや子どもへの関わり方の難しさ、性格や特性の違う子どもたちへの接し方や声掛けの仕方の違いなどを学び、様々な経験や工夫を重ねてきたことで、私の教師観も少しずつ変化してきたようです。

そんな私の教師観を大きく変えた出来事が起こったのは、今から二年前の四月のことです。児童数二十人の小規模校に勤務していた際、特別支援学級が新設されることとなりました。特別支援の免許も経験も無い私は、他人事で、どなたか免許を持った先生が異動してこられるのだろう、などと考えていました。ところが、いざ内示を見ると、期待していたような異動は無く、現在いる教員の中で誰かが特別支援学級を担任することとなったのです。女性教員の方がいいのではないかと引き継ぎと新入児であるため一年生担任の経験などを考慮され、私が学級担任を持つことが決まりました。ここからが、二年間の特別支援学級担任生活のスタートでした。

一年目の四月、入学式。児童の好きなキャラクターを幼稚園の先生から伺っていたので、娘の使い

古したおもちゃの中から探し出し、シールを式場の椅子に貼りました。教室にも、娘が使っていたおもちゃをいくつか並べ、準備万端です。教室に入ってきた児童は、早速、おもちゃを見付け、目を輝かせて遊び始めました。ところが、式場に入る少し前に、シールズを履きたくないと脱いでしまいました。そこで、考え、またまたシールの登場です。シューズにシールを貼ると、苦手なものが一瞬に変わって、お気に入りのアイテムに変わりました。おかげで、無事に式を終え、にこにこの入学式にすることができました。児童の気持ちに寄り添って、指導や支援をしていくことで、こんなにも気持ちや行動に変化があらわれるのだということに気付かされ、大きな学びとなりました。その後も、キャラクターは大活躍で、学習に集中できなくなってくると、キャラクターのイラストを使って児童と一緒に手作りかるたを作って、かるた取りをしたり、娘の使っていたキャラクター塗り絵の続きを塗ったりしたこともありました。

そして、次の転機は、避難訓練でした。非常ベルの音が苦手だという話は聞いていたので、自立活動の時間に何度かベルや緊急地震速報の音を聞かせ、慣れさせてはいるつもりでした。しかし、いざ訓練本番となると、こっちの経路は嫌、外に出るのも嫌、と全く動かなくなってしまうました。他の先生方に助けを求めると、皆さん、避難のため既に外に出てしまっていたため、最終手段、抱きかかえて避難をしました。後から、その話を他校の特別支援学級担任の先生に聞いていただくと、実際に避



難する練習を何度もしておくと良かったね、と教えていただきました。初めてのことや経験の少ないことへの不安感が大きい児童は、事前に詳しい説明をし、練習や疑似体験をすることによって、不安が軽減し、安心して行事に取り組むことができることを実感した出来事でした。二度目の避難訓練では、外での活動の時間に設定し、ハードルを低くして実施したこともあり、無事に避難することができました。また、この経験を生かして、狂言を見せていただく行事の際には、何週間も前から狂言の動画を見せ、雰囲気を感じさせていたことで、みんなと一緒に最後まで会場にいて観覧することができました。

その後も、一年間様々な出来事がありました。学習が難しくなってくると、取り組むことが嫌になつてくるのがあったため、学習時間を短く設定し、できたらご褒美遊びの時間を設けました。その際も、我が子のおもちゃが大活躍。どんどん教室にいろいろなおもちゃを運び込み、ご褒美の時間も充実していききました。また、一般的な方法では覚えられなかった繰り上がりのある足し算学習で

は、足して十一になる式をパトカー、十二を救急車など児童が興味のあるワードを入れて分類することで、楽しく覚えることができました。ときには、気持ち乗らず、同じ敷地内にある幼稚園で、ずっと一緒に遊ばせていただいたこともありました。一年が終わる頃には、ボタンの着脱や紐結び、一輪車の練習など、できることもたくさん増え、自分の気持ちに折り合いを付けて活動することもできるようになってきました。そして、三月。突然の人事異動の内示に、私は驚き、涙しました。

一年間での学びを新任地でも深めていきたいと考え、特別支援学級を希望し、更に一年間経験を積ませていただきました。前任の小規模校と違い、特別支援学級が六クラスあった本校では、担任する児童数も多く、前年とは違った壁にぶつかるともありました。しかし、他の五人の特別支援学級担任の先生方に、話を聞いていただき、アドバイスをいただくことができた環境にあつたので、一年間で更に多くの貴重な経験をさせていただくことができました。

現在、私は、また小学一年生の学級担任をさせていただいています。特別支援学級の担任を経験したこと、様々な特性を持った子どもたちに対する接し方が少し変わってきた気がします。特性や家庭環境など、いろいろなものを抱えている子どもたちが、楽しく、安心して学校生活を送ることができるよう、学校でのお母さんの存在であり、教師である、そんな愛情ある教員で居続けたいと思っています。

学び多き一年



西予市
野村小教諭
井上 脩
(令四卒)

これほどまでに濃密な一年は、二十三年間生きてきた中で初めてだったと断言できる、それほどまでに濃い一年でした。

四月、これからの生活に希望と不安を抱えての初任校への初出勤。そこで再会したかつての恩師、新しく出会った温かくて頼れる先輩教員、そして、圧倒されるほどのエネルギーをもった二年一組十九名の児童たち。多くの出会いがありました。新学期が始まったかと思えば、一週間後に待ち構える参観日の準備とそのための授業作り、懇談会、運動会等々、日々があつという間に過ぎていきました。あまりの怒涛の毎日に、「一週間つて、こんなに早かったかな。」

と思いました。する側ではなく、支える側として初めて行う運動会、水泳記録会、陸上運動記録会、マラソン大会、卒業式などの学校行事、そして毎日の授業の教材研究などを通して、教員になるまで知らなかった多くの事を学びました。初任者は、研修のための出張が何度もありました。初任者研修で大学からの同期や同じ市町村に配属された同期に会うたびに、お

互いの悩みや不安を共有して、アドバイスをしたり励まし合ったりしました。時には、一緒に食事やドライブをして息抜きをすることもありました。似たような境遇にいる者同士、それを分かち合うことで心が軽くなることが多々あり、同期の大切さを感じました。

この一年を通して悩んだことは、私の教員としてのスタイルについてです。児童たちとの関わり方をどうしよう、ブレない指導をするためにどうしようと思ひ続けた一年でした。大学在学中や受け持った児童と関わる前の段階では、

「絶対に叱らない教員になろう。」という自分自身への誓いや信念みたいなものをもっていました。しかし、すぐに学級が立ち行かなくなり、その誓いはあつけなく捨てることとなりました。児童に寄り添うことは大前提であるが、優しいだけ、甘やかすだけでは児童との適切な距離を保てません。かといって、厳しいだけでは児童は離れていきます。自分のその日の体調によつて指導の仕方が変わった、授業がうまくできない苛立ちから厳しくしたりしたこともあり、反省するべき点はたくさんありました。しかし、休日に教育関連の書籍や雑誌を読んだり、校内研修や初任者研修で先輩教員の授業を参観したり、悩みを相談したりしたこと、新たなになりたい、目指したい教師像が見えてきました。二年目は、一年目でやって良かったことは継続し、失敗したことはその経験を糧に同じ過ちを繰

り返さないことが目標です。

教員として嬉しいと感じることは、なんといっても児童が成長した姿を見ることがです。一学期や二学期は落ち着いて授業を受けることができず学習内容が身に付かない、言葉遣いによる友達同士の喧嘩、給食の残食など様々な問題がありました。その問題に対して、放課後学習をする、言葉遣いや学校の決まりを振り返って悪い所は直すなど、一つ一つ指導していきましました。指導してすぐに改善することは難しかったですが、それが一か月、二か月たつにつれて言葉遣いが良くなったり、給食を完食したりする日が増え、三学期はそれを当たり前にできるまでになりました。また、音楽や図画工作科など、私が指導しない教科を受けもつてくださる先生から、「以前と比べて落ち着いたね」「授業がしやすくなった」と言われるようになりました。様々な面で成長してくれた中でも一番嬉しかったのは、苦手な学習を克服してくれたことです。苦手意識のある児童に對して、授業内に解き切ることができなかつた練習問題を休み時間を削って解かせたことや、放課後学校に残って補充学習をしたこと、理解できるまで同じテストを何度もさせたこともありましました。徐々に練習問題を解く時間が短くなつたり、単元テストの点数が伸びたりするようになり、ついに百点満点の答案用紙を本人に返すことができようになりました。できなかつたことができるようになる、その成長に関わらせてもらえ

たことは本当に嬉しく思います。

教員になるまでのこれまでの人生を振り返って、教員の道を見据えたのは大学の進路を考えだす頃からです。まさか教員になったことを小・中学生の頃の私が知つたら驚くと思います。小学校時代の私はやんちゃ坊主だったそうです。ある日、私が通つていた小学校に当時勤務されていた先輩教員に、「学級の元氣すぎる児童に手を焼いています。」と、相談したところ、「あなたも大概やんちゃだったよ。」と、衝撃の真実を知りました。私自身は物静かで優等生のつもりだったので、かなりショックを受けました。確かに思い返せば小学校時代は、叱られた出来事は恥ずかしながら鮮明に覚えています。その内容は私の名譽のためにこの場では割愛させていただきます。中学校でも何度もきついお説教を受けたことはありましたが、不思議と「学校が嫌だ。」という気持ちになつたことはありません。ひとえに、これまでに関わつてくださった先生方が魅力的ですばらしかつたからだと思います。

教員を目指すようになったきっかけはいろいろありますが、両親の存在が一番大きかつたです。両親ともに教員で、小さい頃は休みの日に当時の職場だった学校に何度も行きました。そのため、人よりも「学校」という存在を身近に感じていましたし、「教員」という職業は何も特別なものではない

という認識でした。学校が嫌ではない、「教員」という職が身近だったというところで、大学進学の時に入し、大学で多くのことを学び、教員採用試験に臨んで現在に至っています。

最後に、教員の道を考えている人でこれを読んでいならば、伝えたいことがあります。私は、「子どもと関わる仕事がない」「恩師に憧れて」などといった人に誇れるような志望動機はありません。けれども、私の選択に後悔はありません。この一年を過ごしてみても、教員になって良かったと感じています。もちろん楽しいことばかりではありませんでした。児童や保護者との関係がうまくいかず悩むことは多々ありました。教材研究をしても思い通りに進まない授業、別の学級とは開いていく一方の学力差、初任者だから力不足は理解していても、ベテラン教員との差にも少しは感じました。しかし、野村小学校には迷った時や悩んだ時に助けてくれる、アドバイスをくれる先輩教員がたくさんいました。そういった意味では、私は初任校がこの野村小学校で本当に良かったです。教員になるか迷っている人へ、なつてみたら良いと思います。きつと頼れる素敵な先輩教員が支えてくれるはずです。私もまだまだ学ぶべきことが多く、先輩教員に助けられればかりですが、いつかは頼る立場から頼られる立場になることができるよう精進していきます。

教育学部の授業紹介

今号から現職会員の皆様のご要望にお応えして、愛媛大学の先生方のご協力のもと教育学部の授業を紹介していききたいと思います。

今回は、青井倫子教授、浅川淳司准教授が開講している教育学部三年生以上を対象とした授業「幼児教育実践論」を紹介いたします。なお、この紹介内容は愛媛大学HP掲載の「授業紹介 I Report」から一部抜粋したものです。

「幼児教育実践論」

この授業では、愛媛大学教育学部附属幼稚園に出向き、実際の保育活動に参画することで、三・四・五歳児それぞれの年齢ごとの発達の特徴について学ぶことができます。それらの学びに加え、保育を担当した附属幼稚園の先生方を含めた研究協議や、受講者同士による事例発表・討議に取り組むことで、現場における実践的な指導力の育成を高めていきます。四年生は教員採用試験に向けて、また三年生は九月から始まる教育

実習に向けての貴重な経験を得られる機会となっています。

「授業内容」

今回は、附属幼稚園で行われた年長組（五歳児）の保育活動への参画と、研究協議の時間を取材しました。

保育活動への参画は、朝、園児たちをお迎えするところから始まります。次々と登園してくる子どもたちを笑顔で出迎えると、早速、それぞれの教室へと案内していきます。

取材日はあいにくの雨模様でし

たが、園児たちは積み木で遊んだり、工作を楽しんだり、元氣いっぱいには遊戯室を駆けまわったりと、室内での遊びに夢中な様子。受講生の皆さんも積極的に声を掛け、子どもたちの輪に加わっています。大学生のお兄さん、お姉さんたちと遊べるということもあり、ニコニコと嬉しそうに笑う子どもたちの表情がとても可愛らしく、印象的でした。



積極的にコミュニケーションをとる
受講生



遊戯室で遊ぶ子どもたちと受講生

この日は、「夜のつどい」という行事に向けた準備が行われていました。「夜のつどい」とは、附属幼稚園の夏の恒例行事の一つで、年長組の園児たちが食べ物屋さんやゲームコーナーといった、たくさん種類のお店屋さんを開いて楽しむイベントです。



担任の先生の話聞く園児たち

遊戯室に集まった園児たちは、担任の先生たちの声掛けのもと、誰がどのお店屋さんを担当するかを決めていきます。たくさんのお店屋さんに興味を惹かれる子どもたち。そんな子どもたち一人ひとりの意見を尊重しながらも、先生たちの声掛けによってバランスよく担当が決まっています。てきぱきと準備を進めていく先生たち

の姿を、受講生たちも真剣な表情で観察していました。



指導の様子を観察する受講生

園児たちが帰宅した後は、受講生、大学・幼稚園の先生方による研究協議が開かれました。協議では、その日の出来事を振り返りながら、それぞれが体験した事例を挙げ、「先生として、子どもたちをどう指導すればいいのか」を考えていきます。受講生たちは保育参画した年次（年少、年中、年長）ごとに分かれ、子どもたちの発達段階による指導方法の違いや、幼児教育の在り方等について、活発に意見を交わしていました。



「意見交換の様子」

教科書を手に、机に向かって勉強することは勿論大切ですが、今回、こちらの授業を取材させていただいたことで、「実際の現場で経験すること」そして「その経験を振り返ること」の重要さを改めて感じることができました。

受講生の皆さんが、現場での経験を通して、幼児教育への理解を深め、より素晴らしい教育者になることを期待しています。



意見交換の様子

「教員からのコメント」

本講義は、大学での座学中心の講義ではなく、愛媛大学教育学部附属幼稚園に向いて、学生自身がそこで行われている保育活動に参画することに中心的な意味がある講義です。保育参画で得られた体験を単なる体験に終わらせることなく、保育実践の実際についての理解や、幼児期の発達の体験的理解、さらには実践的指導力の育成へと高めるために、保育を担当した保育者との研究協議、受講者による事例発表と討議が組み込まれています。

特に、保育を担当した保育者との研究協議は、教育実習以外ではなかなか得ることのできない貴重な機会であり、附属幼稚園が全面的に協力してくれています。研究協議の場では、保育者の方々からその日の保育のねらいや直近の子どもの様子などを教えていただけますし、学生からのその日の保育に関する質問にも率直にお答えいただけます。保育者としての専門性や子ども理解の質を高めていく

ためには、保育や発達に関する知識や保育のスキルを学んでいくことはもちろん重要なことですが、それ以上に継続的かつ組織的に自身の保育についてふりかえる機会をもつことが何より重要です。

保育の場では、自分が行っている保育実践や子ども理解がうまくいっているのか、あるいはまずい方向に向かっているのかについて判断することは簡単ではありません。自分ではうまくいっていると思っても、子どもの要求や思いを抑圧して、ただ自分に従わせているだけかもしれません。そのような状況に陥らないようにするためには、他の保育者と意見交換をして多面的に自身の保育をふりかえることが必要であり、ふりかえりを通して、保育に対する理解が深まっていき、実践を改善するきっかけとなります。本講義が、学生自身にとって、子どもの遊びや活動の面白さを発見し、保育を振り返ることの意味と意義を感じられる機会となることを願っています。

表紙作品について

「まもりがめ」

松本紗絵子
(令和五年卒)

卒業制作で『白昼夢』をテーマとして、一〇〇号一枚と一二号八枚を制作しました。表紙に掲載して頂いた作品はそのうちの一枚で、『まもりがめ』という題名です。本作は、共通講義棟での講義中に教育学部本館を眺めていたところ、壁の模様や玄関が甲羅に、植木がヒレに見える、そこから学ぶ人々を優しく見守る神様、と想像したことがきっかけです。このように、日常から一瞬だけ片足を踏み出したような、真昼に見る夢のように現実と地続きの不思議な世界を描きたいと思い制作しています。これからも自分の気持ち大切に、制作していきます。



先輩を偲ぶ



あしあと (8)

先輩たちのあしあと



(教育学部同窓会100年のあゆみより抜粋)

教職から追放されたこと

愛媛県師範学校
保持 徳寛氏寄稿
(大正五年卒)

昭和二年一月三日付で、中央教職員適格審査委員会から「貴殿の審査が開始されるから、弁明の希望があるなら出頭されたい」との通知を受けました。私は、この時、初めて、愛媛県の審査委員から不適格の判定を受けていたことを知りました。

昭和二年一月三日付で、

昭和二年一月三日付で、中央教職員適格審査委員会から「貴殿の審査が開始されるから、弁明の希望があるなら出頭されたい」との通知を受けました。私は、この時、初めて、愛媛県の審査委員から不適格の判定を受けていたことを知りました。

昭和二年一月三日付で、中央教職員適格審査委員会から出頭を求められました。最初の審査では弁明の機会も与えられず、秘密裡に判定を下して中央に報告したのでしたが、差し戻し再審査では委員のメンバーも代わっていたし、今度は慎重を期して弁明の機会を与えてくれたのでしよう。しかし、出頭してみますと期待に反し全くの型式的、申し訳的のものでした。

私は出頭しませんでした。この時の不適格者は二十四人でしたが、中央の委員会では「これはおかしい。二四人もあるはずがない」として差し戻しになりました。教育会の一部に「この際、林閭を一掃せよ」と策謀するものがあり、暗躍したという噂を後になって聞き

はありませんでした。受験希望者が二人ありましたので、高二担当の教師が放課後補習授業をしたまでです。」

「君は高等科の女生徒に、軍事訓練の目的で竹棒訓練をやったことがあるか。」

「やりましたが軍事訓練ではありません。戦前から女兒に杖術を課する学校がありました。婦人会の竹槍訓練にヒントを得て、杖の代わりに竹棒を使っただけです。竹槍訓練が軍事訓練でないのと同じように、全く精神訓練が目的でした。」

「君は教育会越智部会名で興亜読本を発刊して郡内の児童に読ませ、大東亜共栄圏の指導的理念の基礎教育を培おうとしたか。」

「発刊して児童に読ませたのは事実です。しかし、そんなむつかしい目的からではありません。隣国志那と仲よくしなければならぬ。そのためには子供の時からそうした教育をせねばならぬと思ったのです。内容もそうした趣旨のものでした。」

「読本の中に一行でもアメリカを賞めた文句があるとよいのだが、それが無い。」

私はがっかりしました。読本の発刊は昭和一四年五月で、アメリカとの開戦は昭和一六年二月八日でしょう。何で、アメリカを賞めたり、悪く言ったりする必要がありました。私はこんな委員によって審査されることを悔しく思いました。

「〇〇君(委員名)、もう汽車の時刻でしょう。ではこれで終わりにします。」

その間わずかに五分。

そして昭和二年九月一日、先に委員から尋問を受けたと同じ理由で不適格の判定を下され、爾後、教職員並びに教育行政の実務に従事すること及び奉職校に出入りすることを禁ぜられました。私の五分間の弁明は何の役にも立たなかったわけです。二四人のうち追放されたのは、今治高等女学校長の渡部盛義君(大正八年卒)と元桜井国民学校校長の私だけでした。退職している者(私は昭和二年四月退職)に追い打ちをかけて追放するなど審査のずさんさを物語っています。

その後、中央審査委員会に弁明書を提出しておきましたら、昭和二年八月二三日「どれも不適格の理由にはならぬから適格とする」という判定がありました。

一人の改革者

愛媛県女子師範学校
越智 玉置氏寄稿
(大正一一年卒)

ただ今、愛媛大学教育学部として輝かし脚光を浴び、ほがらかに青春を謳歌しつつ、教育者としての道を修めていらっしゃる女子学生達には、甚だ以て不可思議とともたられるであろう、昔昔の女子師範生徒の、寄宿舎生活の一端を記して、「百年のあゆみ」のページに思ひ出の花を活けさせていた。ならば望外のしあわせである。

白衿に四季を通じての白足袋、めくら縞に近いじみな織物模様の元禄袖、色という色のない服装の中、ただ一つ若さを表現するエビ茶袴を裾長にはいた私達の姿。その袴の紐も前で蝶結びにして垂らすのでなく、後へ回して結ぶとい



うきまりであった。

寄宿舎の日々は分秒たがわぬ鈴の音に従って始まり、終わって門限、点呼、全きびしい女子軍隊生活といっても過言ではない。髪は束髪、前で分けてゆえば不良がかつて見えて舎監の先生の目がきびしい。唯一のたのしみの手紙もよく監督され、怪しいと思われると受信者呼び、目の前で開封させられる。異性との交際など思いもよらぬことであった。家がどんなに近くでも外泊は許されない。こうした寄宿舎生活に一大福音が訪れたのは、たしか四年生のころだったと思う。それは土曜から日曜にかけての外泊が許されたことである。これは私達のクラスのH・Mさんが生徒を代表して舎監の先生と再三、再四交渉の末、やっと許されたのであって、一同驚いた。黙々として規則に従うより何も知らない私達の中に、こうした先覚者が居ようとは、しかも一同を代表して筋の通ったことをしてくれようとは、まったく驚きであった。さっそく私ははつらつとして、土曜日の午後、石手川の堤を通って帰宅し、家族を驚かした。あの時の感激は今も私の胸をほのぼのとさせてくれる。あの時先頭に立ったH・Mさんは級の中でも頭脳明晰、抱擁力と実行力を

合わせ持った偉大な人物であったと思う。在校中は終始親交を保っていたが、卒業後は消息を断ってしまった。今はどこにどうして居られるであろう。こうした些細な思い出を書いたのは、小さい改革を積み重ねつゝ、五〇年経過した愛媛大学の前途を祝福したい気持ちに外ならない。いつの世にも幾多の試練にいどみながら、後ずさりでない本当の発展に向かって進むことは、尊いことだと思う。ましてや戦争という大試練の後の教育界の発展に多大な勇猛心が必要だと思う。古今東西、真なるものは真、人間の真実のために生きたいと思うと同時に、先覚者の必要性をしみじみ思うのである。

学生時代と今

愛媛大学教育学部

村上

昇氏寄稿

(昭和三〇年卒)

卒業後二十数年、各地で小学校創立百周年記念行事を見、参加して、その歴史の風雪を知っている。我が母校「愛媛大学教育学部」も、その年に当たり、母校の歴史と変化が物語として、一コマ、一コマとなり身近な現象としてクロースアップしてくる。その意味で、学生生活四年間も何か大きな意義を

秘め、巣立った先輩、後輩の諸氏との関係が縦横無尽に広がり重なり合って厚いものとなっている感を強める。

今日の自分を成したものは、学生生活の中で培われたものが大きな因子となっていることに気づく。それは、一般教養・専門教育の中で個人として、集団として、少人数のグループの中で、自分が造り上げられてきたのであるが、なんといつても、次の二つが大きい因子であるように思う。

その一つは、よい友に恵まれたことである。受講の中で、憩いの場で、わだかまりのないことばが交わされた。各々の個を大切に、一つのわくの中に閉じ込めないで協力し合った点にあると思う。自分の解決すべき点はちゃんと残し、興味・関心に走らない。しかも追従・服従ということもなく、個としての自分を生かす場があった。グラウンドで、屋上で、階段教室で、その機会をたびたびもつたことが目前に、次々と浮かんでくる。

第二は、研究室に入り、よい教官、先輩に恵まれたこと。自分の足を使い、手を使い探求する心とその大切さを身をもって指導していただいたことである。現地調査を主軸とし、協同の中にも個性を

明確に位置づけ、次々と自信と実践行動を育成する方法を考えてくれた。昼間の調査計画実践・夜間の打ち合わせ・食事準備計画・レクリエーション等の中に、協同協力の大切さ、個の大切さ、思考判断の大切さ等、十分に吟味させてくれたことである。

とくに、研究室として、温泉郡中島町睦月、野忽那両島での研究調査を思い出す。学生の特権を生かし、便船に無料で乗船し船先に当たる波をかぶりながら友と先行した光景や、寺で一泊した時に、家族の一員のように、来客のために自分が使用しないで、蚊帳を提供してくれた住職、心から世話してくれた娘さん、翌朝の起床が気持ちよく、あまりしたことのない寺の庭掃除など思い出す。

これらの中で、年令・学年を超



卒業をひかえての語らい (昭和30. 2)

越したリーダーが、炊飯・交渉外交・現地での食料確保・資料収集整理・レクリエーションなどの場面に生まれる。また、蛸をとらえ、蛸の足の巻きついた手をふり上げ、「離れんか」と蛸の頭を打ったり、球を投げるようすをしたり、「フラダンスは、こんなにして」等名コチもでてくる。

相馬正胤・村上節太郎両教授の暖かい無言の指導も忘れられない。個人で調査資料の収集活動をして、両教授の助けにより、どの公的機関に行っても最大の協力を得、資料を出され「この机を使って仕事をなさい」と言われた時の気持ち、今でも筆に書き表せないほどで「お茶をどうぞ」と言われて出された湯飲みの中が酒であった苦い経験もある。相互の信頼の上にことが達成されていく喜びは忘れられないものである。しかも、社会の実状をあまり知らない個人が、助けにより、一段、一段積み重ねられ完成に近づいて行く行動は楽しいものである。

児童や父母と話し合えるのも、高い場所に立っているは無理であり、先人の「初心にかえれ」という言葉は、つねに念頭に置く必要がある。学生生活で得た経験を生かし、個を、集団を見つめる力を養いたいと思う。

会員の声



「教育学博士」論文の

完成を目指して

―大拙・英訳「教行信証」の研究―



吉原 宏文
(昭四二卒)

最近、素晴らしい本を入手した。即ち、「NHK・カールさんとティーンさんの古民家村だより」である。ドイツ人の建築デザイナーであるカール・ベックスさんは、不思議な縁で、新潟県十日町市竹所という、豪雪地帯として過疎化が進み、その存在すら危ぶまれた、山間の集落に定住することになった。日本で知り合ったアルゼンチン出身のクリスティーナさんと結婚し、一九九五年、夫婦で竹所に移住し、美しい木立、あふれる緑に清冽な湧き水、遠くに連なる棚田が広がる風景などに心を奪われ、ここに暮らすことにした。二人が住む家は、江戸時代に建てられたという茅葺き屋根の

古民家。朽ちかけ傾きかけた空き家を、まだ十分再活用できると見て取ったカールさんは、柱や梁などの骨組みや古材を生かし、快適な住まいに再生した。和と洋が美しく溶け合うこの家の名は「双鶴庵」。つがいの鶴は死ぬまで添い遂げるとされたことから名付けたという。

その後、カールさんは、集落内の古い空き家を一軒ずつ再生し、カラフルな古民家村に生まれ変わらせた。この竹所で第二の人生を送りたい、ここで子育てをしたい、と移住する人が増え、地元の人たちとの絆も深まって活気を取り戻し、「奇跡の集落」といわれるようになった。

カールさんの祖父も父も、二度の世界大戦で戦死。旧東ドイツに生まれた彼は、「絶対に戦争で死にたくない」と、自由を求めて十九歳のとき、東ベルリンから、深夜、川を泳いで西側に脱出。日本文化の愛好家だった父の影響で来日を決意し、建築デザインの仕事と様々な偶然に導かれ、竹所に来た。今は、こここそ故里であり、ここで死にたい、と……

カールさんは、一九四二年生まれで、今、八十歳。偶然の一致！ 私（吉原）も同年生まれ、今、八十歳を越えた。しかし、私は不幸にも、生涯独身という運命の星の下で生きねばならない。私の「業」とはいえ、近年、頓に寂しさを感ずる。しかし、会報に投稿する我が儘を許され、充実した日々を送れることは感謝の言葉しかない。是非、「教育学博士」論文を完成し、この世に生きた証としたい。

さて、大拙博士の文章の続きに返ろう。益々難解になつていくが、怯むことなく前進していききたい。

人間の先端は神の好機である。人間は有限であり、あらゆる点で制限されている。一方、神はこれを全て超越している。我々全存在者（一切衆生）は、条件付

きで、その極端さをもつ。阿弥陀仏は、無限で、永遠であり、如何なる障害も妨害も知らない。また、自由であり、言葉のあらゆる意味で創造的である。我々がその先端に達し越えて見えるものは、形のない虚空でもなく、虚無でもなく、自暴自棄でもなく、全ての望を捨てることでもなく、全くの零でもなく、地獄でもない、ことを発見する。しかも、人間の先端を越えて広がるものは、神秘に満ちた無限の可能性の「貯蔵」（阿頼耶・ālaya）、無数の価値（福德・puṇya、阿僧祇・asankhya）の完成である。そこで、我々は、前方への跳躍ではなく、横さまの跳躍（横超）であるような「跳躍」を実行する。それは、我々が有限の存在領域にあつては決して体験できない霊性領域（psycho-sphere）に転入することである。そのとき、我々はこの相対性の世界にいる間は、決して夢見るのできなかった秩序集団の仲間（正定聚）に加えられる。ところで、実存主義者達とは、それを越えては絶対に行くことができない究極の否定に到達する。彼らの論理学や弁証法が彼らにそう語るからである。彼らは、最後の否定は絶対的肯定そのものであるという事実、また、彼

らが体験する全否定はこの絶対的肯定であるという事実、そして、それ以上は役に立たないものが、実際には、ここで秩序よく穏やかに、そして、心地好い安らかさで纏まるといふ事実に気づいていない。哲学者や論理学者に概して欠けているものは、全信仰と全誠実（本心を偽りなく話すこと）に存する個人的内面の資質や德行である。彼らは、知的正直さを十分に持っているかもしれないが、残念ながら、彼らの知性が究極のものであり、それを越える何もない、と考えている。つまり、彼らにそのように考えさせているあるものに気づいていない。思索者、人格、絶対的「主体」があることを忘れている。彼の背後へ、あるいはその内面に一歩踏み込む勇氣がない。心の「内」ではなく、単に、心の「外」にあると思ひ込んでいるものに目を奪われ続けられている。彼らが直面していると考えているあるもの、あるいは、ないものは、実は、彼ら自身の心の内にあるという事実気づかない。より適切に言えば、彼ら自身が「それ」であるという事実気づいていない。人が、自己を客観と主観（肉体と靈魂）に三元化し、内にあるものを後回しし、外にあるものを自己と思ふ限り、

人は決して「真の自己」であることはできない。「真実で誠実であること」は、存在の全体を投げ捨てること、死することによって生きていること、十字架にかけられ、そして復活すること、を意味する。これは、我々人間が経験できる最高の神秘性である。真仏教 (Shin Buddhism・浄土真宗) においては、阿弥陀の回向（えきう）経験として周知のものである。則ち、阿弥陀仏から人間に向かって流れ出てくるものである。

知的二元論者あるいは二元化論者の不運は、彼らが必死に欲しがるものを最終決定において予期し、あるいは外に向かう習性のために、内に向かうことに失敗し、熱望するものが、既に実際にそこにあるという事実を思わず知らず認めてしまうことである。言い換えると、彼らの内に居住しているこの軽んじられた「見知らぬ人」は、最も忠実で不屈な精神をもつて、また、最も不変な一貫性において彼らを追い求めている。実には、彼は、「見知らぬ人」でもなく、「他人」でもなく、あなたの本来の、かつ、最も親密な「自己」なのである。我々が、彼に規定された名前を与え、彼を阿弥陀他力と呼ぶのは、我々の日頃の、世界を説明する知的方法の

おかげにすぎない。阿弥陀仏は、我々が我々自身より他者を論じる、無限の価値の存在である。一方、我々人間は、全く有限で自己制限的存在である。しかしながら、真実には、我々が僅かでも内に向かつてその有限性を認めるや否や、我々の内への阿弥陀仏の出席あるいは入場によって扇動されて、無限を自覚するようになる。こうして、真仏教（浄土真宗）の信奉者達は、「他力」の支持者と呼ばれる。この「他力」は、また、本来の祈りの力（日本語で本願力・梵語で purvapanidhana-bala）として周知されている。

(三) 阿弥陀仏の無限の光明は、一直線として出て行くのではなく円環的である。その光は、敬虔な信奉者に至り届く。それは「跳躍」として経験される。しかしその跳躍は切れ目を越える通常の跳躍とは異なる。切れ目、則ち、一つの秩序あるいは平面から他のそれへ飛び越すこととであり、厳密に言えば、有限から無限へ、横切つて超えること（横超）として知られている。この跳躍—経験によって、間違ひなく阿弥陀仏の浄土に行き着いて、遂に、至高の悟りを成就する仲間に加わることが登録される。

跳躍—経験は、また「阿弥陀仏の名前を発音すること」（「称名」として知られる。その経験は、信奉者の命の臨界点で生じる。則ち、彼が決断しなければならぬと感じるその時である。扉に抵抗して、その全存在を投げかけて、見よ！「扉はあなたに開かれています」。開くことは、阿弥陀仏の名前を称えることである。発音するとは、ただ唇を動かすことではない。重大な決断力が、我々の全存在、則ち、肉体と靈魂との統合体に与えられる。しかし、我々に押し付けられるものは何もない。我々は零である。名前そのものの、南・無・阿・弥・陀・仏！

ここで、「名前」について少し説明したい。我々は、何気なく、ごく当たり前に名前を使っている。しかし、対象は名のられることによって現象するという事実を忘れがちである。名前は名のられない限り、実在しないも同然である。何故なら、それを考慮することとできないからである。その際、名前はいかなる意義ももたない。しかし、名前がその完全な価値のもとで名のされると、真実そのものと同然である。これが、悪霊がその知られた名前を見ることを嫌う理由である。故に、名前と悪霊は我々の支配下にある。我々は、

名前を好きなように使える。ある人は、薔薇はどんな名前と呼ばれようと、甘い香りがすると言うかもしれない。しかし、それは真ではない。薔薇は不快な名前と呼ばれると、その美しさと芳しさを失う。孔子は、それ故、名前は当然あるべき仕方使われるよう、対象に相応しい名前を選ぶべきだと語っている。そうすれば、名前は力に満ち、その完全な意義と効果において実在そのものとなる。

これは、阿弥陀仏の名前においても真である。敬虔な信奉者が阿弥陀仏の光明に目覚めるとき、その光明は無限の名前において彼の心をつつ。それは本心に不可思議な力を生み出す。何故なら、彼が一瞬のうちに、永遠そのものである跳躍を成し遂げるのはその時であるから。しかし、同時に、これは、我々の特有な理性（本識・citta）が介入し、名前をつけたものは、その名前を発音することとが全てであり、ここにおいて、阿弥陀仏によって成し遂げられた奇跡があると、我々に感じさせる瞬間である。これが、体験による裏付けのない概念化が、人間の宗教生活において最も危険な側面である。

彼の名前が全ての仏国に浸透することに失敗し、そこに居住している全存在者（一切衆生）によって聞かれないならば、私は最高の悟りに到達しません、と。その時は、その名前は阿弥陀仏の名声と何の関係ももたない。しかし、阿弥陀仏という名前がその名声に起因するならば、それはあらゆる美德と価値をもった真理そのもの（如性・Suchness）である。こうして「跳躍」の奇跡的体験は、阿弥陀の回向—活動 (pariṇamana) の成果である。（続く）

二〇二三年（令和五年）

二月二十三日（木）天皇誕生日

私は、原爆投下時、三歳で、広島県下の山村に住んでいたので、直接の被爆は避けられました。しかし、放射能を含んだ黒い雨の影響が、八年前に白内障の手術を受けました。

目下、鴻上尚史先生（新居浜市出身）の「Cool Japan」と夏井いつき先生（愛南町出身）の「プレバト・俳句」を欠かさず観ています。

731-0135

広島市安佐南区長束一丁目十八ー五

明静庵主

平和と向かい合って



井手 窪理
(昭和三十七年卒)



一四歳の自分がいとらしい。

昭和二十九年（一九五四）五月
一五日 日記の書きはじめにこうある。（写真一）

（自分のこと） 桜の花も散って山は緑の着物を着る頃となり、中学校生活も残すところわずか一年足らず、修学旅行も終わりさつそく勉強に力を入れようと思ってい

る。
（社会のこと） 水爆実験・MS A・教育二法案など重要な問題が



写真1
「学友日記」1954年

起こっている。のみならず、保安隊などができて、憲法改正などと、日本の国が大きく分かれる境目であるように見える。

そこで、「朝日クロニクル週刊20世紀」（朝日新聞）をもとに、その頃のことを調べてみた。

昭和二十五年（一九五〇）一月一日
マッカーサー 日本国憲法は自己防衛の権利を否定せずと年頭

声明
昭和二十五年二月一〇日
GHQ 沖縄に恒久的な基地建設工事を二、三か月中に開始すると発表

昭和二十五年二月一三日
吉田首相 参議院外務委で、占領下の軍事基地承認は日本の義務と答弁

昭和二十五年六月二五日
朝鮮三八度線全線にわたり、南北朝鮮軍全面的な戦争状態に入る。

昭和二十五年七月四日
閣議 朝鮮における米軍の軍事行動に行政措置の範囲内で協力する方針を了承

昭和二十五年七月七日
安保理 アメリカによる国連軍指揮を決定。八日マッカーサー元帥、国連軍最高指揮官に任命される。二五日司令部を東京に設置

昭和二十五年七月八日
マッカーサー 吉田首相あて書簡で、警察予備隊七万五、〇〇〇人の創設 海上保安庁の八、〇〇〇人増員を指示

昭和二十五年七月一七日
吉田首相 参議院本会議で「日本は再軍備すべきでない」と発言

昭和二十五年八月一〇日
警察予備隊令公布 即日施行
二三日第一陣約七、〇〇〇人入隊

昭和二十五年二月一三日
地方公務員法公布 公務員、公立学校教員の政治活動・スト禁止

昭和二十六年（一九五二）三月一六日
マッカーサー元帥離日 衆参両院が感謝決議を可決。羽田空港までの沿道に見送りの都民ら約二〇万人が詰めかける。

昭和二十六年四月一九日
マッカーサー元帥がアメリカ議会演説。その最後に「老兵は死なず、ただ消えゆくのみ」と名文句

昭和二十六年五月五日
マッカーサー元帥がアメリカ上院の聴聞会で、「日本人は現代文明の標準からいえば四五歳といわれわれの発達度に比べて一二歳の少年みたいなのである」と述べた。（これに対して、吉田茂は「回想十年」の中で、「自由主義や民主主義政治では日本人はまだまだ若いけれど」という意味であり、「将来の発展はすこぶる有望」と強調しているのだと弁護している。）

昭和二十六年九月八日
対日講和条約調印 日本を含む四九か国が調印 日米安全保障条約調印（写真2）

昭和二十七年（一九五二）一月一日
米国が南太平洋のエニウエイトクで初の水爆実験

昭和二十八年（一九五三）十一月三日
吉田首相が衆議院予算委員会

で、「保安隊は戦力なき軍隊」と答弁

昭和二十九年（一九五四）二月二二日
政府が教育の中立性に関する教

育二法案を国会に提出
昭和二十九年三月一日
アメリカが南太平洋マーシャル諸島で水爆実験 三月二五日と四月六日にも実験実施。静岡県焼津市の漁船「第五福竜丸」がビキニでの水爆実験による放射線被曝



写真2

昭和二十九年三月八日
日米相互防衛協定(MSA協定)調印 六月九日 MSA協定に伴う秘密保護法公布

昭和二十九年三月一一日
防衛庁法案 自衛隊法案を国会に提出

昭和三十三年（一九五八）一八歳の頃の自分がなつかしい。愛媛大学教育学部一回路。山岳部で一緒になった繁永睦夫君（山口県出身中等教育科理科）の誘いで同じ下宿に移った。一般教育（一年半）は松山市持田にあった本部、文理学部で受けた。その中の社会科学関係に「日本国憲法」があった。大野盛直教授がどのような講義を

したかは覚えていないが、確か必修だったと思う。

(前文) 日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。

(第九条) 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。②

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

繁永君ともこの講義を大階段教室で受けた。彼は長州男児を自負し、人なつこい男であった。

やはり山岳部で親交のあった学生に宮本忍君(文理学部法律)がいる。父親は同じ愛媛大学文理学部の教授で山岳部の部室の前の官舎に住んでいた。ご家族はクリスマスチャンであった。宮本君は熱い男であった。カトリック研究会にも所属していた。私も一時期そのカトリックにいたことがある。顧問は韓国生まれの武田神父だった。映画

会をしたり、松山市岩堰でコンパをしたり、学内ボートレース大会に出たりした。彼と道後のカトリック教会にも何度か行った。神父はスペイン生まれのオレンシオ・ペレスである。「日本に長くいると、少し髪が黒くなったような気がする。」と言っていた。(写真3)

繁永君、宮本君と私の三人はよく話し合ったものである。民主主義、社会主義、非武装中立など日本のかたちや進むべき方向について。

昭和三十七年(一九六二)三月愛媛大学教育学部を卒業した。卒業式で香川冬夫学長は「一隅を照らす人になれ」と訓辞下さった。昭和三十八年四月 上浮穴郡面河中



写真3
カトリック映写会

学校に赴任。そこで三年。同美川中央中学校で一〇年。そして同黒藤川中学校へ。そこでも一〇年勤務した。同校勤務中昭和五五年一月、県外僻地教育研究調査で広島県(山と島の中学校へ三泊四日)へ行かせていただいた。

さらに、同五六年十一月一日から一二月一日まで国立教育会館筑波分館で第九八回教職員等中央研修講座(中堅教員研修講座)を受講させていただいた。

その前日、旧友宮本氏に会うことにした。一時二〇分、巨大都市東京に着いた。彼に電話をする。

あいにく外出中とのことで、若い社員が東京駅まで迎えに来てくれ、駅の近くの会社のビルの一八階に案内される。客を大切にするマナーがよい。これから、二〇年振りに友に会うのである。やがて、旧友との握手。一緒に昼食を取り夜にかけて東京を案内してくれた。東京駅界隈。上野公園。浅草。隅田川。国立教育会館。文部省等霞ヶ関官庁街。そして、夜の銀座。その間、クリスマスチャンでもある彼の人間性に再び触れることができた。東京と田舎の生活のことをしきりに話し合った。その夜は、彼が予約してくれた上野不忍の池のホテルで一泊した。

十一月一日 上野駅九時一〇分発急行ときわ五号にて土浦着。一時受け付け。国立教育会館筑波分館差し回しのバスで研修会場に着いた。その日は、快晴で暖かった。

赤とんぼ筑波に雲もなかりけり
正岡 子規

受講番号二九一番 中学校第四部会B班(中四B)となる。全国北は北海道から南は沖縄までの中堅教員が集まってきた。私は、小柄な沖縄県の女教師に気付いた。生まれてはじめて出会った沖縄の人。先の大戦からの悲惨な歴史に思いをはせ、胸に込み上げてくるものをおさえることができなかった。(写真4)

〈筑波便り〉

拝啓 さる一〇日に入所以来、晴天の日が続いています。そちらはいかがですか。私は校長先生をはじめ先生方や生徒たちのことを思い出しながら、全国からお集まりの先生方と一緒に寝泊まりをして、研修を続けております。今週は教養関係の講義です。この立派な施設の中で、その道の大家のお話が聴けることの喜びをかみしめています。

それでは、長い間留守をしてご迷惑をおかけしますが、よろしく



写真4 教職員等中央研修講座
(愛媛県からの参加者)

お願い致します。寒さが加わってまいります。お体くれぐれもご自愛ください。敬具

その後お元気ですか。さる九日に上京した際には忙しい時にもかかわらず、東京を案内していただき誠に有難うございました。まったくお礼の申し様ありません。おかげで東京のことが少し分りかけました。(中略)別れて今日まで一日も雨が降らず、整った施設の中で、元気に快適に研修を受けています。

大学生時代、小生の二十歳の誕生日のとき、あの山岳部の部室へ、君が酒とたばこを持って来て、祝ってくれたことなどを思い出しております。その節は、本当に有難うございました。それでは、お体ご自愛の上ご活躍ください。

令和5年度 支 部 長 会 報 告

事務局長の病気治療に伴い延期になっていた令和5年度支部長会を7月8日(土)校友会館2階サロンにおいて小助川学部長にご臨席いただき開催いたしました。予定していた議案及び確認資料は下記の通りです。

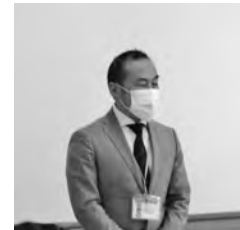
【式次第】

1 開会のことば

2 会長挨拶

3 教育学部長挨拶

4 各支部長自己紹介及び支部紹介



挨拶される小助川学部長

5 議事（議長：松山支部長）

議案1 令和5年度本部役員改選案

議案3 令和4年度事業報告

議案5 令和5年度事業計画案

議案7 令和5年度支部助成金案

議案9 第19回愛媛大学教育学部同窓会懇親会

議案10 愛媛大学教育学部同窓会会則改正案

議案2 令和5年度同窓会役員案

議案4 令和4年度決算報告

・監査報告

議案6 令和5年度予算案

議案8 令和5年度支部活動支援費

議案11 その他

6 協議事項 ・支部のあり方について
・支部活動について

7 連絡事項 ・第14回ホームカミングデーについて
・会報原稿担当予定について

閉会挨拶（奥定顧問）

【結果報告】

- 各議案とも賛成多数で承認となりました。
- また、支部長によるグループ討議の結果は次の通りです。
支部助成金の活用について（各支部の情報交換より）
 - ・通信費や郵送料として使っている。
 - ・支部助成金を教育実習生（愛媛大学生）のための支援金としている。
 - ・懇親会に活用している。（山間部なので交通費も含めて）
 - ・落語研究会から講師を招へいする費用に活用した。地域の方も喜んでいた。
 - ・今後、研修会への補助など会員にとってよりよい活用の仕方を考えていきたい。
 - ・入学した学生は、会費（2万円）を払っているが、教員にならなかった人も含めて周知をしていくことが大切だ。あわせて若い人への還元も考えていく必要がある。
 - ・支部編成のあり方について実態をもとに再考してほしい。

【その他】

- 第14回ホームカミングデー開催に関する情報提供

令和5年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧 問	小助川 元 太・奥 定 一 孝			監 事	大久保 礼 子	事務局長	阿 部 修 一
	会 長	高 橋 治 郎				原 佳 嗣		
	副 会 長	井 上 洋 一			菅 田 顕		村 上 朋 子	
		阿 部 晋			矢 野 裕 司		金 築 治 美	
部	理 事	青 野 多喜夫	竹 上 正 也	山 本 千鶴子	満 田 泰 三	村 上 嘉 一		
		和 田 和 子	垂 水 葉 子	後 藤 陽 三	辻 井 芽美子	白 石 久美子		
		渡 邊 恵 理	山 内 望	玉 井 知津江	石 川 圭	高 橋 祐 貴		
		鴻 上 亜 紀	幸 島 恭 輔	福 岡 幸 恵				

県 内 支 部	支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	篠 原 隆 輔	新 宮 中	高 木 淳	上 分 小	出 射 隆 裕	新 宮 小
	伊予三島	毛 利 雅 彦	中曾根小	渡 部 振一郎	三島西中	一 柳 直 宏	寒 川 小
	土 居	星 野 尚 子	長 津 小	河 村 智恵美	関 川 小	高 橋 正 成	長 津 小
	新 居 浜	井 川 昭 二	船 木 小	鴨 田 礼 子	金 子 小	丸 山 律 子	宮 西 小
	西 条	石 原 道 代	神 戸 小	松 井 直 樹	西条北中	中 江 雅 人	橘 小
	東予・周桑	山 田 裕 之	多 賀 小	杉 野 学	石 根 小	大 砂 直 樹	吉 岡 小
	今 治	藤 原 勝 彦	富 田 小	山 口 峰 松	立 花 中	亀 田 義 彦	日 高 小
	今治・越智	脇 阪 順 三	大 西 小	菅 洋 二	鴨 部 小	三 好 春 彦	上 浦 小
	北 条	毛 利 直 史	北 条 小	高 月 知 代	栗 井 小		
	松 山	大久保 礼 子	雄 郡 小	中 矢 達 雄	新 玉 小	正 岡 洋 介	余 土 中
	東 温	熊 田 堅	上 林 小	川 上 斉 睦	重 信 中	田 原 久 嗣	西 谷 小
	伊 予	山 下 吉 信	砥 部 小	久保田 貴 章	松 前 小	二 神 博	宮 内 小
	上 浮 穴	佐 藤 太	久 万 中	竹 本 明 仁	仕七川小	長 井 正 樹	久 万 小
	大 洲	飯 野 剛 宏	菅 田 小	松 井 英 樹	喜 多 小	長 谷 晃 徳	河 辺 小
	喜 多	元 永 和 孝	石 畳 小	宮 部 修一郎	五十崎中	山 崎 勝 弘	五十崎小
	八 幡 浜	上 田 徳 彦	真 穴 小	浮 田 和 人	白 浜 小	河 野 恵 子	真 穴 小
	西 宇 和	井 上 太	伊 方 中	木 村 良 太	三 机 小	大 石 友 紀	瀬 戸 中
	西 予	三 好 則 史	大野ヶ原小	西 川 浩 司	宇和町小		
	宇 和 島	永 井 悟	住 吉 小	清 水 美 和	清 満 小	森 泰 祐	奥 南 小
	北 宇 和	富 永 晴 子	日 吉 中	上 甲 和 典	三 島 小	徳 田 英 樹	日 吉 中
	南 宇 和	片 山 新 也	福 浦 小	井 上 武	家 串 小	加 州 景	御 荘 中
	附 属	山 内 望	附属特支	石 川 圭	附属特支		

県外支部	東 京	成 見 由紀子	森 孝 枝	
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪			
	神 戸	平 山 昇		
	岡 山	春 名 貞 和		

編集委員	村 上 朋 子	阿 部 晋	矢 野 裕 司
	阿 部 修 一		

→新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止（または書面議決方式による）

令和4年度 事業報告

令和5年度 事業計画

4. 4 (月)	令和3年度会計監査	監査実施
4. 6 (水)	令和4年度入学式	学部生166名 院生47名 編入生9名 計222名
4. 20 (水)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 6 (金)	第1回編集委員会	会報134号編集
5. 14 (土)	第1回理事会	令和4年度本部役員案審議 令和3年度事業及び決算報告 令和4年度事業計画案及び予算案審議
6. 4 (土)	支部長会	令和4年度本部役員案審議 令和3年度事業及び決算報告 令和4年度事業計画案及び予算案審議 令和4年度支部助成金案等確認
6. 15 (水)	第2回編集委員会	会報134号最終確認・校正
7. 1 (金)	同窓会報134号発行	会報発送作業 (8,000部)
7. 6 (水)	第3回編集委員会	会報135号のレイアウト確認
	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
7. 15 (金)	支部活動支援金申込締め切り	各支部において教育学部名で後援・賛助できるもの
7. 30 (土)	第2回理事会	支部活動支援金及び前期事業報告
8. 21 (日)	第18回教育学部同窓会懇親会	教育学部同窓会員・恩師参加
	第13回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加
11. 12 (土)	第3回常任理事会	同窓会事業の今後について
11. (未)	学部サポーター制による講義	教育学部卒業生による講演
12. 16 (金)	第4回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 18 (水)	第4回編集委員会	会報135号最終確認・校正
2. 1 (水)	同窓会報135号発行	会報発送作業 (8,000部)
2. 4 (土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画案について
3. 3 (金)	第5回常任理事会	令和4年度事業反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (金)	令和4年度卒業式	学部生170名 院生48名 計218名

4. 6 (木)	令和5年度入学式	入会者 計207名
4. 12 (水)	令和4年度会計監査	監査実施
4. 19 (水)	第1回常任理事会	第1回理事会提出議題審議
5. 13 (土)	第1回理事会	令和5年度本部役員案審議 令和4年度事業及び決算報告 令和5年度事業計画案及び予算案審議
6. 7 (水)	第1回編集委員会	会報136号最終確認・校正
	臨時常任理事会	支部長会発送準備・提出議題審議
7. 1 (土)	臨時常任理事会	支部長会資料準備
7. 8 (土)	支部長会	令和5年度本部役員案審議 令和4年度事業及び決算報告 令和5年度事業計画案及び予算案審議 令和5年度支部助成金案等確認
7. 12 (水)	第2回編集委員会	会報137号のレイアウト確認
	第2回常任理事会	第2回理事会提出議題審議
7. 14 (金)	支部活動支援金申込締め切り	各支部において教育学部名で後援・賛助できるもの
7. 29 (土)	第2回理事会	支部活動支援金及び前期事業報告
8. 1 (火)	同窓会報136号発行	会報発送作業 (8,000部)
	第14回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加
11. 11 (土)	第3回常任理事会	同窓会事業の今後について
11. (未)	学部サポーター制による講義	教育学部卒業生による講演
12. 15 (金)	第4回常任理事会	第3回理事会提出議題審議
1. 10 (水)	第3回編集委員会	会報137号最終確認・校正
2. 1 (木)	同窓会報137号発行	会報発送作業 (8,000部)
2. 3 (土)	第3回理事会	年間事業の反省 新年度事業計画案について
3. 1 (金)	第5回常任理事会	令和5年度事業反省、次年度重点活動目標設定について
3. 23 (土)	令和5年度卒業式	学部生□名 院生□名 計□名

令和4年度 決算書

(収入の部)

(単位:円)

費 目	本年度予算	本年度収入	増 減	摘 要
1. 会 費	3,960,000	4,100,000	140,000	入会者 (205名) @20,000
2. 寄 付	150,000	133,480	△ 16,520	寄付金・送料等
3. 雑 収 入	20,000	273	△ 19,727	利息・校友会補助等
4. 繰 越 金	2,121,978	2,121,978	0	
計	6,251,978	6,355,731	103,753	

(支出の部)

費 目	本年度予算	本年度支出	増 減	摘 要
1. 会 議 費	150,000	37,419	112,581	支部長会・理事会等
2. 旅 費	400,000	357,600	42,400	支部長会・理事会等
3. 印 刷 費	1,400,000	1,343,304	56,696	会報年2回等
4. 通 信 費	400,000	231,407	168,593	会報発送、連絡費
5. 給 与 費	800,000	800,000	0	
6. 備 品 費	100,000	57,805	42,195	プリンター・ハードディスク
7. 消耗品費	150,000	57,735	92,265	封筒、ラベル、コピー代等
8. 支部助成費	420,000	374,390	45,610	
9. 卒業記念費	400,000	404,800	△ 4,800	電波時計230個(予備込)
10. 国際交流基金	200,000	200,000	0	
11. 懇親会補助費	250,000	0	250,000	
12. 支部活動支援費	300,000	70,000	230,000	芸能・文化支援等
13. 学部活動支援費	100,000	0	100,000	
14. 雑 費	481,978	90,917	391,061	職員録・環境整備費他
15. 予 備 費	700,000	0	700,000	
計	6,251,978	4,025,377	2,226,601	

残 高 2,330,354円 (次年度への繰り越し)

令和5年度 予算書

(収入の部)

(単位:円)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 費	4,140,000	3,960,000	0	入会者 (207名) @20,000
2. 寄付・会報送料	150,000	150,000	0	寄付金・会報送料等
3. 雑 収 入	20,000	20,000	0	校友会補助・利息等
4. 繰 越 金	2,330,354	2,121,978	208,376	
計	6,640,354	6,251,978	388,376	

(支出の部)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	150,000	150,000	0	支部長会・理事会等
2. 旅 費	450,000	400,000	50,000	支部長会・理事会等
3. 印 刷 費	1,400,000	1,400,000	0	会報年2回(封筒印刷込)
4. 通 信 費	400,000	400,000	0	会報発送・連絡費
5. 給 与 費	800,000	800,000	0	
6. 備 品 費	100,000	100,000	0	
7. 消耗品費	150,000	150,000	0	タックシール 文具類代等
8. 支部助成費	420,000	420,000	0	
9. 卒業記念費	420,000	400,000	20,000	
10. 国際交流基金	200,000	200,000	0	
11. 懇親会補助費	250,000	250,000	0	懇親会補助
12. 支部活動支援費	300,000	300,000	0	芸能・文化支援等
13. 学部活動支援費	100,000	100,000	0	学部サポーター活動支援等
14. 雑 費	800,354	481,978	318,376	学生謝礼 玄関環境整備費
15. 予 備 費	700,000	700,000	0	
計	6,640,354	6,251,978	388,376	

※△は減額を示す

愛媛大学教育学部同窓会会則

第1章 総則

第1条 (名称)

本会は、愛媛大学教育学部同窓会と称する。

第2条 (所在地)

本会は、事務局を松山市文京町3番地愛媛大学教育学部事務課内に置く。

第3条 (支部)

本会は、愛媛県下各都市及び必要と認めるところに支部を置く。

第2章 目的及び事業

第4条 (目的)

本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする。

第5条 (事業)

本会は、目的達成のため次の事業を行う。

1 会員の親睦並びに教育振興に関する事業

2 会報発行に関する事業

3 母校の支援に関する事業

4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

第6条 (会員)

本会は、次の会員をもつて組織する。

1 正会員

・愛媛師範学校(男・女)卒業生

・愛媛青年師範学校卒業生

・愛媛大学教育学部卒業生

・愛媛大学大学院教育学研究科等修了生

・母校の現教職員及び旧教職員

・愛媛大学教育学部在学学生

・本学部卒業生外の大学院教育学研究科

在学学生

第4章 役員

第7条 (役員)

本会に、次の役員を置く。

1 顧問 若干名

会長 1名 副会長 若干名

2 理事 若干名

常任理事 若干名

3 監事 2名

事務局長 1名

4 支部長 各支部1名

副支部長 各支部若干名

5 支部幹事 会員在勤各学校1名

第8条 (役員の選任)

顧問は、愛媛大学教育学部長及び同窓会長経験者を推す。

1 会長・副会長・監事は、総会において選任する。

2 理事・事務局長は会長が委嘱する。

4 支部長は、各支部において選任する。

5 支部幹事は、支部長が委嘱する。

第9条 (役員の任期)

会長・副会長・理事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。なお、任期途中で交代した場合は、前任者が残した任期とする。

第10条 (役員の仕事)

1 顧問は本会の主要な事項について諮問に応ずる。

2 会長は、会務を総括する。

3 副会長は、会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。

4 常任理事は、常任理事会を組織し、本会の諸事業を企画立案し、理事会の議案に資する。

5 理事は、理事会を組織し、本会の主要事項について協議する。

6 監事は、本会の事業状況及び収支決算状況を監査する。

7 支部長は、各支部の会務を掌る。

第5章 会議

第11条 (総会) 総会は年1回開催し、支部長会をもつて総会に代えることができる。

1 事業報告・決算書

2 事業計画・予算書

3 役員選出

4 本会の目的達成に必要な事項

第12条 (支部長会)

1 支部長会は、本会の目的達成に必要な事項について協議する。

2 支部長会は、会長が招集し、必要ときは臨時招集することができる。

3 支部長会の議長は、支部長の中から選出する。

第13条 (理事会)

1 理事会は、年3回(5月・8月・1月)開催し、常任理事会より提出された議案について協議する。

2 理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

3 理事会の議長は、会長が務める。

第14条 (常任理事会)

1 常任理事会は、年5回開催し、会則第5条に示された事業の企画立案をし、理事会の議案資料の作成にあたる。

2 常任理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。

3 議案資料の作成は、事務局長がこれにあたる。

4 常任理事会の議長は、会長が務める。

第6章 会計

第15条 本会の経費は、会費及び寄付金等をもつてこれにあてる。

第16条 本会の会費は、入学の際に納めるものとする。

第17条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第7章 会則変更

第18条 本会の会則を変更するときは、総会の決議を経なければならない。

附則

本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。

本会の会則は、令和5年7月8日より実施する。

本会の運営上必要な内規は別に定める。

愛媛大学教育学部同窓会 支部活動支援金交付要綱

第1条

【目的】この要綱は、愛媛大学教育学部同窓会（以下「愛教同窓会」という。）会長が、「愛教同窓会」活動の振興と支部活動の活性化を図るため、各支部及び支部に属する会員が行う自主的な活動に対して、予算の範囲における支援金交付に必要な事項を定めるものとする。

【支援金申請者】

第2条

本事業の申請者は、支部長とする。

第3条

【支援金対象事業及び支援額】本事業の対象となる事業活動及び支援金額は審査会（常任理事会）において審議する。

第4条

【支援金申請手続き】本事業支援金を受けようとする支部及び支部に属する会員は、「愛教同窓会」会長が定める期間内に、下記書類を「愛教同窓会」事務局に提出しなければならない。

(1) 支部活動申請書（様式第1号）
(2) その他、必要と認める添付書類

第5条

【支援金の交付決定】

「愛教同窓会」会長は、前条の規定による申請を受理した場合、その内容をすみやかに審査し、常任理事会の意見を聞いて支援金の交付を決定するものとする。

「愛教同窓会」会長は、前項の規定により支援金の交付を決定したとき、すみやかにその旨を申請者に通知するものとする。

第6条

【支援金の交付請求】

支援金の交付決定を受けた申請者は、すみやかに支援金交付請求書（様式第2号）を「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

第7条

【支援金の支払い】

「愛教同窓会」会長は、申請者から交付請求書の提出があった場合、書類受理後常任理事会を経て交付する。

第8条

【活動実績報告および決算報告】

支援金を受けた申請者は、支援事業の交付決定にかかる年度の11月30日までに、下記の書類を「愛

第9条

教同窓会」会長に提出しなければならない。

(1) 支部活動報告書（様式第3号）
(2) 会報掲載のための原稿（A4用紙1枚）

【交付の取り消しまたは返還】

「愛教同窓会」会長は、次の各号いずれかに該当する場合は、交付決定の全部または一部を取り消し、支援金の全部または一部を返還させることができる。

第10条

(1) 支援金の交付申請に不正の事実があったとき
(2) 支援金を目的以外の用途に使用したとき
(3) 支援事業を中止したとき
(4) 支援事業を遂行する見込みがなくなったとき
(5) この要綱に違反したと認めたとき
(6) 実績額が支援金交付額に満たないとき

【その他】

この要綱に定めるもののほか、支援金交付に関する必要な事項は、「愛教同窓会」会長が別に定める。

(様式第1号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金申請書				
支部名				
活動名				
活動予定日時				
参加員数 (予定数)	現職 〇名	その他 人	合計 人	人
支 部 の 活 動 目 的 ・ 内 容 (活動目的・内容をできるだけ簡潔に記入 ※詳細は計画書添付のこと)				
目 的				
経費・共費				
内 容	※天正から記入後、要領は添付書類を添付			
支 援 金	※天正から記入後、要領は添付書類を添付			
有期支援金(※天正から記入) ※ただし、手数料込の金額とする。				
件数連絡先	Email: doosokai.ed.uhime@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中)			

(様式第2号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部支援金請求書				
活動名				
活動日時	年 月 日() : ~ :			
請 求 金 額				
一 金				
上記金額を支部支援金として請求いたします。				
代表者(担当責任者名) 印				
振込先	金融機関名	支店名	口座名	口座番号

(様式第3号)

愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

年 月 日

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金報告書				
支部名				
活動名				
活動予定日時	年 月 日() : ~ :			
参加員数 (予定数)	現職 〇名	その他 人	合計 人	人
報 告 内 容 (金体の様子や会員の様子を簡潔に記入)				
活動の様子				
金計報告	※天正から報告と記入後、要領は添付書類を添付 ※収支報告は二の添付で提出(※天正から記入)			
件数連絡先	Email: doosokai.ed.uhime@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中)			

教育学部からのお知らせ



教育学部のコース再編について

— 愛媛大学教育学部 —



令和六年度入学生から、子どもの発達特性や特定の分野に強みや専門性をもった教員の養成をめざし、これまでの初等教育コース、中等教育コース、特別支援教育コースを、教育発達実践コース（幼年教育サブコース、小学校教育サブコース、特別支援教育サブコース）、初等中等教科コース（言語社会教育サブコース、科学教育サブコース、生活健康・芸術教育サブコース）に再編します。小学校教育サブコース以外では、複数の免許状の取得を卒業要件としています。幼小の連携、ICTの効果的な活用、特別支援教育の充実、義務教育九年間を見通した指導など、子どもを取り巻く教育的課題の解決に向けて、学校間の接続や教科等の横断的な視点から多様性や連続性に対応して指導できる教員の養成を目指しています。

表1 現在のコース・専攻

コース	サブコース・専攻
初等教育コース	幼年教育サブコース
	小学校サブコース
中等教育コース	国語教育専攻
	社会科教育
	数学教育専攻
	理科教育専攻
	音楽教育専攻
	美術教育専攻
	保健体育専攻
	技術教育専攻
	家政教育専攻
特別支援教育コース	英語教育専攻

表2 令和6年度からのコース・サブコース

コース	サブコース（教科）	
教育発達実践コース	幼年教育サブコース	
	小学校教育サブコース	
	特別支援教育サブコース	
初等中等教科コース	言語社会教育サブコース	国語教科
		社会教科
		外国語（英語）教科
	科学教育サブコース	算数・数学教科
		理科教科
		技術・情報教科
	生活健康・芸術教育サブコース	家庭教科
		体育・保健体育教科
		音楽教科
		図画工作・美術教科

詳しい情報は、教育学部案内、愛媛大学教育学部HPをご覧ください。

(<https://ed.ehime-u.ac.jp/edhp/>)



放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二三年十月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二三年六月十日（土）～九月十二日（火）

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々には次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。



放送大学



教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2023年度10月入学生募集中！

（2023年9月12日まで）

問合せ先 **愛媛学習センター**

TEL 089-923-8544



●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル

放送大学 www.ouj.ac.jp



0120-864-600

教育学部同窓会からのお知らせ



第19回愛媛大学教育学部同窓会懇親会について

第17回（2020年）、第18回（2022年）と新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止となっており、また教育学部同窓会懇親会ですが、次年度（2024年）に第19回愛媛大学教育学部同窓会懇親会として開催いたします。

次年度（2024年）は、愛媛大学発足75周年となる記念の年になります。この間大学内はもちろん教育学部も大きく変わってきております。会員の皆さんが学んだ当時を思い出しながら現在の構内や教育学部を見学していただきたく、懇親会場を愛大生協リーゼス（食堂）としました。

詳細につきましては、来年2月に発行する会報137号でお知らせいたします。

期日 2024年8月25日(日)

時間 12:00～15:00

場所 愛媛大学生協

愛媛大学教育学部 同窓会



校友会からのお知らせ

例年、校友会が実施しておりますホームカミングデーですが、コロナ禍で中止や規模を縮小しておりましたが、今年度は懇親会を含め実施を計画しています。楽しい企画や記念品を用意してお待ちしています。

期日：令和5年11月11日(土)

※詳細は 校友会ホームページをご覧ください。



5 ・ 2 ・ 8	5 ・ 2 ・ 3	5 ・ 2 ・ 3	5 ・ 1 ・ 30	5 ・ 1 ・ 26	5 ・ 1 ・ 15	5 ・ 1 ・ 5	5 ・ 1 ・ 4	5 ・ 1 ・ 4	4 ・ 12 ・ 22	4 ・ 12 ・ 22	4 ・ 12 ・ 16	4 ・ 12 ・ 14	4 ・ 11 ・ 25	4 ・ 11 ・ 12	4 ・ 11 ・ 3	4 ・ 10 ・ 27	4 ・ 10 ・ 10	4 ・ 4 ・ 27	(死亡年月日)
(昭30) 門屋 哲也 (愛大)	(昭25) 福永 行雄 (青師)	(昭19) 佐藤 和正 (愛大)	(昭18) 後藤 莊二郎 (愛大)	(昭34) 明星 方夫 (愛大)	(昭31) 丸田 寿万子 (愛大)	(昭29) 水口 省三 (愛大)	(昭45) 西山 武利 (愛大)	(昭28) 廣瀬 幸一 (愛大)	(昭30) 池田 三樹子 (愛大)	(昭25) 飯野 一之 (愛大)	(昭27) 神野 福二 (愛大)	(昭29) 竹井 史一 (愛大)	(昭33) 木下 淳 (愛大)	(昭28) 内田 利勝 (愛大)	(昭26) 吉田 稔 (愛大)	(昭15) 塩崎 薫樹 (県師二)	(昭24) 北川 裕子 (愛大)	(昭19) 堀内 矩昭 (青師)	(氏名)

敬

吊

(物故会員)

※同窓会へのご寄附ありがとうございました。

吉原 宏文 様
井内 康之 様
鹿島 弓聖 様

令和5年1月～6月

寄付者名

5 ・ 4 ・ 20	5 ・ 4 ・ 7	5 ・ 3 ・ 23	5 ・ 3 ・ 17	5 ・ 3 ・ 16	5 ・ 3 ・ 12	5 ・ 2 ・ 26	5 ・ 2 ・ 25	5 ・ 2 ・ 24	5 ・ 2 ・ 16	5 ・ 2 ・ 15	5 ・ 2 ・ 15	5 ・ 2 ・ 14	5 ・ 2 ・ 14	5 ・ 2 ・ 11	5 ・ 2 ・ 10
畑部 順子	(昭35) 愛大 加洲 史朗	(昭18) 愛大 織田 吉祝	(昭22) 愛大 山内 之夫	(昭34) 愛大 川口 博子	(昭63) 愛大 関谷 無己	(昭15) 女師二 千葉 文子	(昭24) 青師 高橋 寛	(昭31) 愛大 平田 ミノル	(昭29) 愛大 阿部 晏	(昭24) 研究 中岡 健一	(昭24) 研究 伊藤 貞子	(昭33) 愛大 横山 慶三	(昭23) 青師 野村 東生	(昭25) 愛大 山内 善行	(昭25) 正史 宮内 正史

会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写真を事務局にお送りください。



① 初秋の面河溪谷でススキと黄花のコラボです。

② 夜空に開く大洲の花火大会の一場面です。

③ 高知県北川村「モネの庭」の風景です。

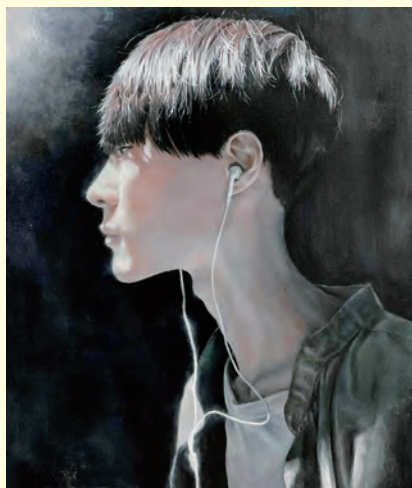
〈同窓会事務局提供〉

文芸欄

掲載の絵画は準会員で教育学部3回生の平井晴樹さんの作品です。今後も準会員の皆さんの作品を紹介していきたいと思います。



Stardom



雨燦々



木洩れ陽